ゆの山御てん

有馬温泉・湯山遺跡発掘調査の記録

神戸市教育委員会

ゆの山御てん（湯山御殿）

―― 有馬温泉・湯山（ゆのやま）遺跡発掘調査の記録 ――

―― はじめに ――

阪神・淡路大震災から五年が経過しました。平成の大不況とも重なり、神戸は震災前の状態に未だ戻ったとは言えませんが、今年初めにはすべての仮設住宅も解消し、少しづつ復興の歩みをすすめています。

阪神間ほどの甚大な被害ではなかったものの、北区有馬町でも兵庫県南部地震による被害がかなりありました。有馬極楽寺も本堂・庫裏ともに大きな被害を受け、庫裏については建て替えという事態になりました。太閤秀吉の湯山御殿跡は、この庫裏建て替えを契機として四百年ぶりに発見されたのです。

調査後、この遺跡は『太閤の湯殿館』として公開されることになりましたが、これは震災復興に伴う発掘調査が行われた数多い遺跡のなかで保存・公開された数少ない例になります。今では有馬温泉の新たな観光スポットとして数多くの来館者があり、『太閤の湯殿館』の開館は観光地有馬の震災復興に直接につながるものと思います。

本書は湯山遺跡の発掘調査の概要を報告するものです。有馬町における発掘調査は今回が初めてであり、有馬温泉の歴史についての最初の考古学的な報告となります。太閤さんの愛した有馬について理解の一助になれば幸いと存じます。

最後になりましたが、遺跡の調査中ならびに本書刊行にあたりご協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

平成十二年三月

神戸市教育委員会教育長　鞍本　昌男

―― 目次 ――

有馬温泉の位置とその歴史 ―― 3
秀吉と有馬温泉 ―― 7
発掘に至る経緯・発掘の経過 ―― 11
安永二年(1773)の火災面（第一遺構面）の調査 ―― 14
元禄八年(1695)の火災面（第二遺構面）の調査 ―― 18
安土桃山時代の遺構面（第三遺構面）＝ 湯山御殿跡の調査 ―― 22
湯屋関連の遺構 ―― 26
庭園関連の遺構 ―― 36
石垣と帯曲輪 ―― 41
御殿敷地の造成 ―― 46
湯山御殿跡から出土した遺物類 ―― 48
まとめと湯山御殿のその後 ―― 56
遺跡の整備 ―― 57
『太閤の湯殿館』案内 ―― 58

表紙　1. 岩風呂ＳＸ３４
湯ぶねの金泉をＣＧ合成
見返し　2. 雪の調査地・泉源
裏表紙 111. 石組みの一部を復元した湯山御殿庭園

3. 有馬温泉の町並み（南から）　左寄り中央やや下に極楽寺の屋根がみえる。

── 有馬温泉の位置とその歴史 ──

六甲山系の北麓、山ふところ神戸市北区有馬町に有馬温泉が所在します。かつて湯山（ゆのやま）（明治二十九年に湯山町から有馬町に改称）とよばれた有馬温泉は、日本書紀にも「有間（ありま）の湯」としてその名が見え、古くから知られた湯治場です。飛鳥時代には舒明天皇・孝徳天皇が訪れていることが記録に残るなど、往時の都である奈良・京都から一番近い湯治場として都からも多くの人々が訪れています。その長い歴史のなかには山津波や大火などによって荒廃した時期もあったようですが、平安時代末には仁西上人が、安土桃山時代には豊臣秀吉が山津波や火災で荒廃した湯山の復興に尽力したとされ、湯山を最初に整備したと伝えられる行基とともに有馬の三恩人として土地の人々の崇敬をうけています。

このたび太閤秀吉の湯山御殿跡が確認された寂静山極楽寺は、有馬の温泉街の南にある愛宕山山腹の狭い平坦地にあります。このあたりは地元で寺町とよばれ、北に念仏寺、西に行基が創建したと伝えられる温泉寺、南に湯泉神社と寺社の集まる地区で、このあたりからは有馬の温泉街を一望することができます。有馬川の流下する北方は山中で唯一眺望がひらけ、標高462.8ｍの愛宕山山頂からは遠く有馬富士や羽束山（はつかやま）などを望むことができます。

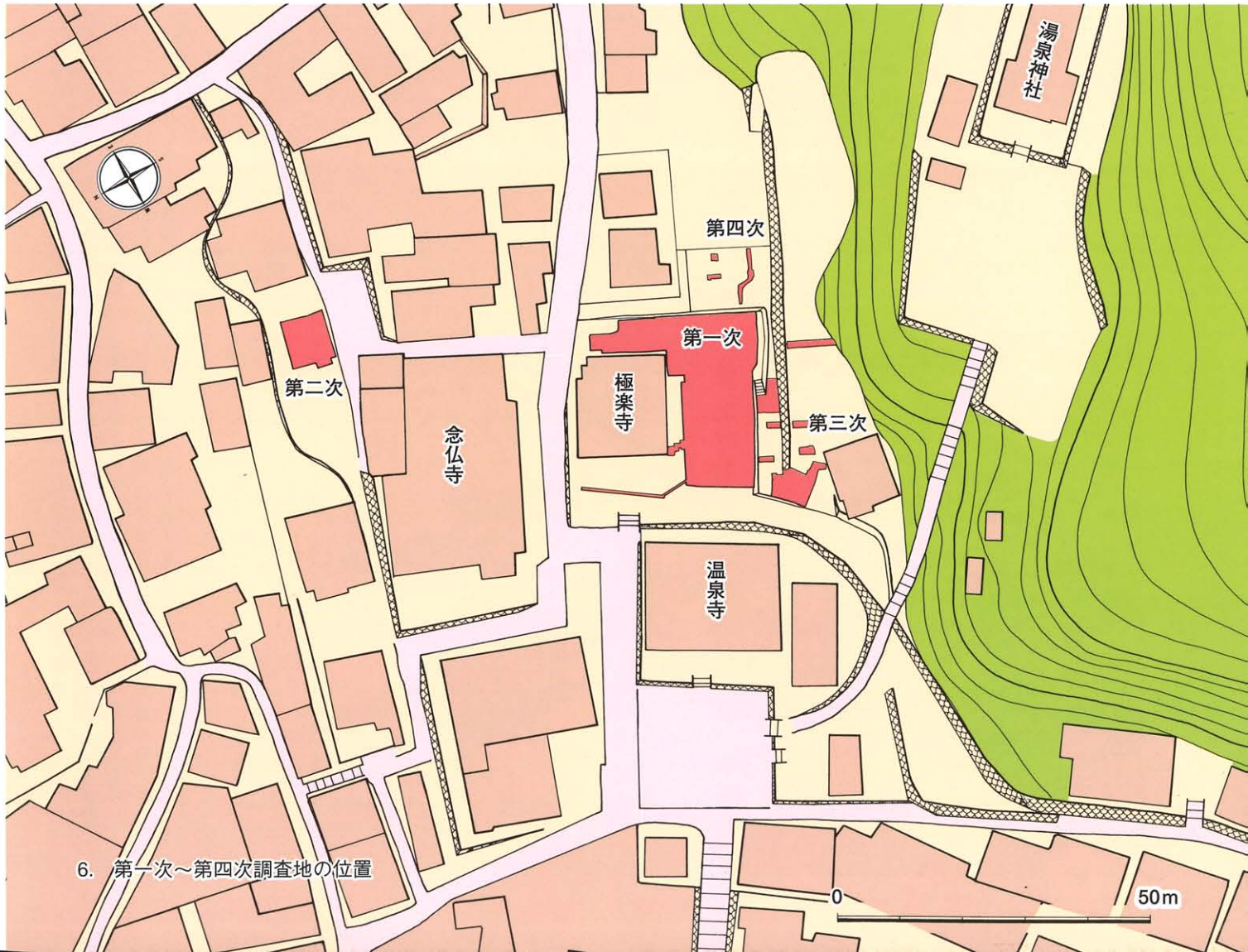
有馬温泉にかかわる江戸時代までの文献は、風早　恂氏が細大漏らさず集められ、それらは『有馬温泉史料』上下二冊に網羅されています。文献の上では多くの記録がある有馬湯山ですが、これまで発掘調査の行われたことがなく、考古学的には未開拓の地域でした。考古学的な扱いになる遺物としてあげられるのは、かつて清涼院に伝来した文永八年(1271)銘のある金銅板製経箱がほとんど唯一といえます。平安時代末に埋納された経箱３点が享録元年(1528)に温泉寺境内から発見されたという記録もありますが、実物は伝わっていません。

北区役所有馬連絡所
湯けむり公番
有馬川
有馬温泉駅
祓石
太古橋
白鳥大明神
駐車場
有馬御苑
六甲川
万年橋
古泉閣
北畑
金慶荷
兵衛向陽閣
池ノ尻
有馬ビューホテル
有馬ヘルスセンター
中の坊瑞苑
奥の坊
有明泉源
天満宮
天神泉源
善福寺
バスのりば
橋の家
一文字
有馬温泉観光総合案内所
温泉会館(本温泉)
御所坊
高山荘華野
東門
雪国神社
杖捨橋
宝泉寺
上大坊
御所泉源
滝川
花小宿
角の坊
有馬保養所
池之坊満月城
有馬ロイヤルホテル
念仏寺
温泉寺
極楽寺
太閤湯殿館
極楽泉源
林溪寺
吉王稲荷大明神
あなむちの神地(氷天宮)
御幸荘花結び
射場
竹取亭円山
妙見宮
湯泉神社
有馬消防会館
杉谷
炭酸泉源
プリンセス有馬
池之坊賦山荘
鴻臚館
月光園
やまと
愛宕山
あたご山公園
天狗岩
かんぽの宿有馬
滝本神社
杉山
関電有馬山荘
地獄谷
鳥地獄
虫地獄
有馬稲荷神社
リッチライ
0
200m

4. 有馬市街

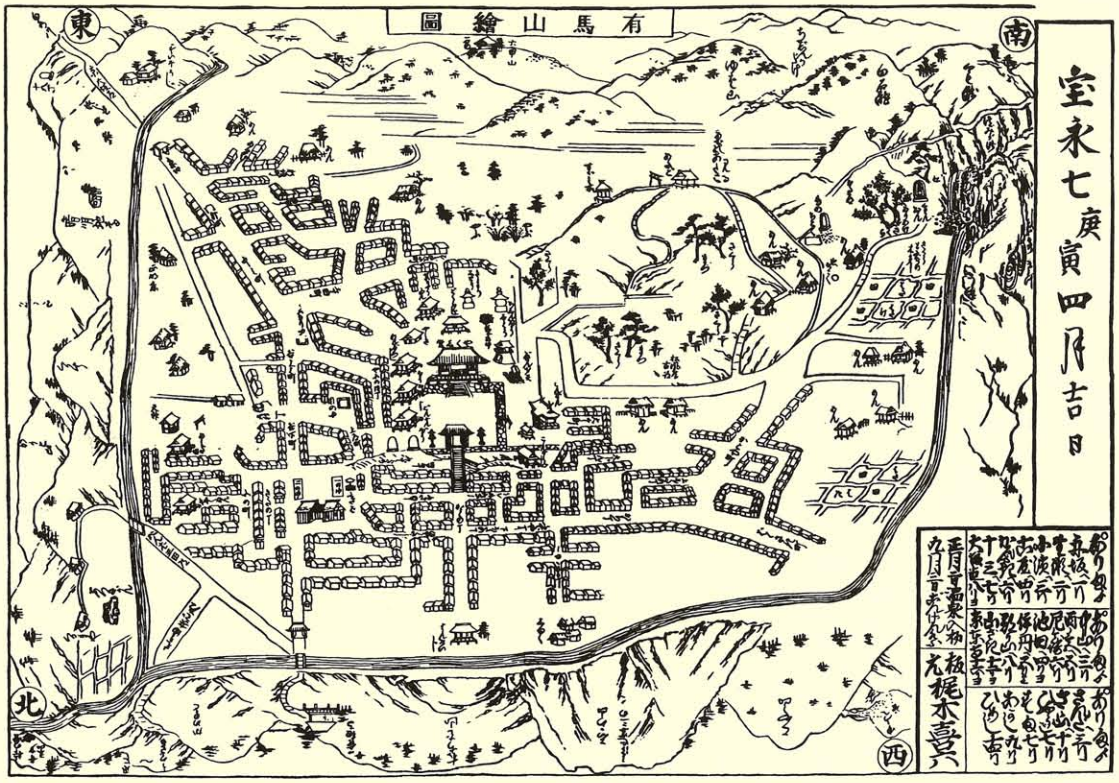
5. 調査地周辺遠景（北西から）

明治時代後半の絵はがき。中央やや上の木造校舎がかつての湯山小学校。その左手前に念仏寺、その右に極楽寺、さらに右に温泉寺がみえる。左寄り中位やや下、二階建ての上に小さい屋根がつく建物が本温泉すなわち現在の有馬温泉会館。

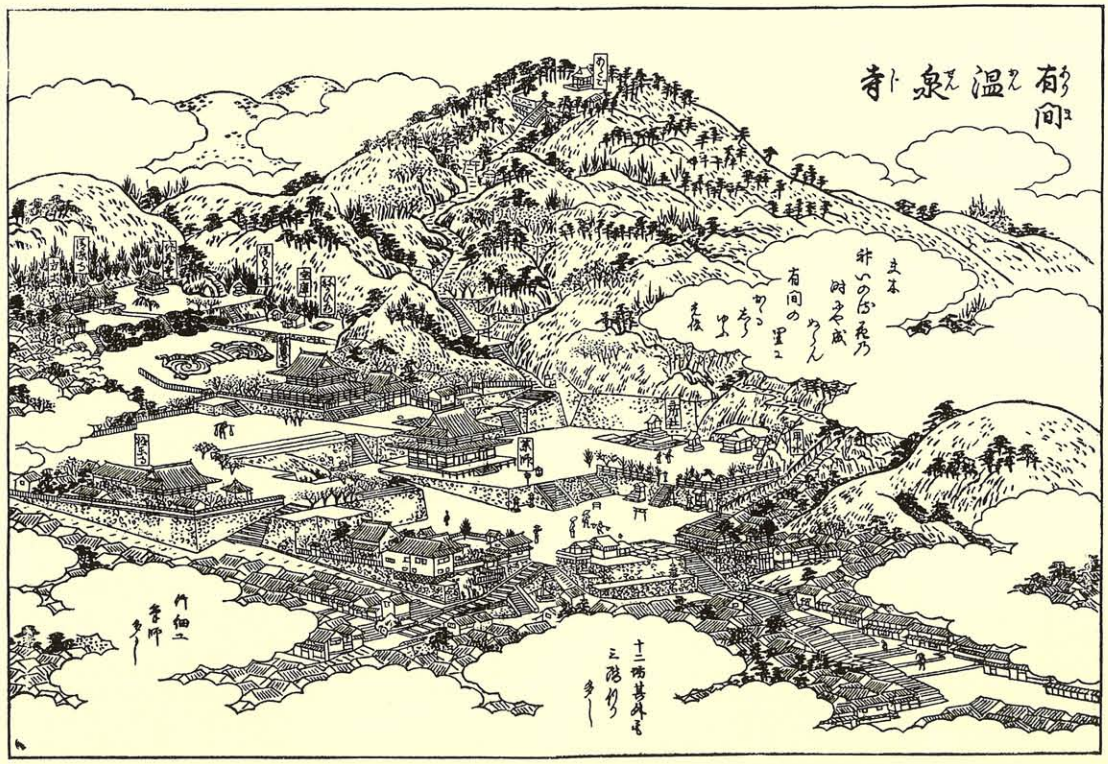


6. 第一次～第四次調査地の位置

今回発掘調査を行った極楽寺の歴史については、罹災したため伝えられる古文書類が少なくはっきりしませんが、寺伝によると江戸時代初めに当地に移ったものといいます。その後元禄八年(1695)と安永二年(1773)の二度火災に遭っています。現在の本堂、そして解体された庫裏は天明元年(1781)に再建されたものです。



7. 宝永七年(一七一〇)の有馬ガイドマップ『有馬山絵図』
(神戸市立中央図書館蔵)



8.『摂津名所図会』寛政八年(一七九六)にみえる寺町界隈
町割りは現在とほとんど変わらない。薬師とあるのが温泉寺。極楽寺が報恩寺、念仏寺が極楽寺と誤記されている。この方向からでは極楽寺本堂のかげになって「願いの湯」はみえないはずだが、位置をずらせて描かれている。庫裏が増築され、「願いの湯」が見られなくなるのはこれ以降のようである。

―― 秀吉と有馬温泉 ――

現在の有馬温泉繁栄の直接の恩人とされる秀吉は、有馬湯山を自身の領地とし、たびたびこの地を訪れています。秀吉が湯山とかかわる最古の記録は天正七年(1579)のもので、織田信長を迎えるため有馬郡山口荘（西宮市山口町）の人々を道路普請に徴用する三月十日付の文書です。四月五日には湯山阿弥陀堂の寺領を安堵しており、このころには有馬の地が秀吉の支配下にあったことがわかります。

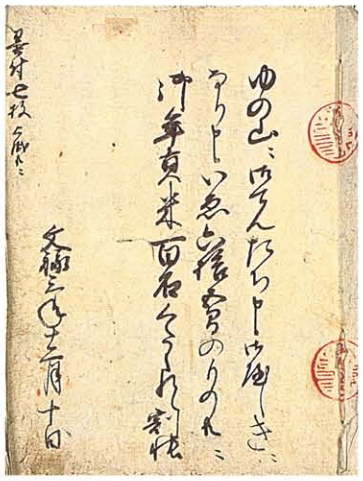
秀吉が有馬温泉を訪れたことが公式な文書の上で確認できる最初が天正十一年(1583)、最後が文禄三年(1594)で、都合九回が確認できます（13表）。このほか天正八年(1580)三木城攻めに勝利した秀吉は疲れを癒すために湯山を訪れ、ここで二日間眠りつづけたとする記事が『温泉寺古写記』にみえ、正式な記録に残っていない湯山訪問がこのほかにもあったと考えてよいでしょう。

天正十三年(1585)、秀吉三度目の湯治に同行した北政所は天正四年(1576)の大火で焼失した薬師堂（温泉寺）の再建費用として千五百貫、さらに地料として毎年百石を寄進しています（9写真）。

9. 豊臣秀吉室杉原氏（北政所）寄進状案（善福寺蔵）

そのとおりなを
さおい（相違）
あるましく候
かしく
御やくし
たう
たて候
ためにくよう（公用）
千五百貫
つか
ハし候
地りやうの（料）
事
まいねん
百石つゝ申
つけ候
天正十三年
二月五日
（封）
あミた寺まいる
ね

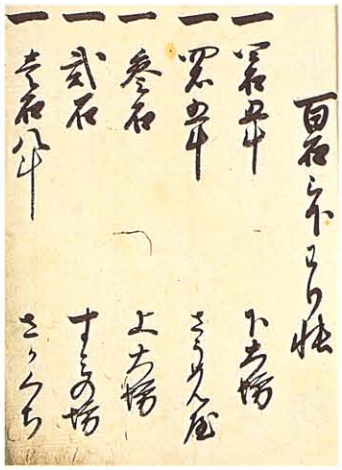
当初、秀吉は有馬滞在の宿舎として、現在の天神泉源付近にあった「阿弥陀堂」を利用していて、ここで千利休や津田宗及を招いて茶の湯を催しています。その後、文禄三年(1594)に、自身の御殿を造らせていますが、この際に六十五軒の家々が強制退去させられているという記録があり（10写真）、その敷地はかなり広いものであったと考えられます。ところが、この湯山御殿はその二年後、慶長元年(1596)に起きた大地震で倒壊してしまいました。翌年、秀吉はこれを再建させますが、慶長三年(1598)、この地震にともなって新たな地点、温泉寺の子院である奥之院にあった慈心坊尊恵の石塔の下から温泉が涌き出、そこにも新たに「仮の御殿」などを造らせています（11写真）。



ゆの山に御てんたち申候　御屋しきニ
なり申候いゑ六拾五間のもの共ニ
御年貢米百石くたされ候割帳

墨付七枚　上紙共ニ

文禄三年十二月十日



10. 豊臣秀吉下げ渡米割帳（余田家蔵）

百石被下わり帳

一　四石五斗　下大坊
一　四石五斗　さうめん屋
一　参石　上大坊
一　弐石　すミの坊
一　一石八斗　さかくち

11. 有馬縁起（極楽寺蔵）

然而慶長三年戊戌自正月五日　右之大
破御殿再興有　出来次第　可被成御湯治
旨　被仰出　有馬法印[初]・山崎左馬允[家盛]・蒔田
主水[広忠]頭・山崎右京進[前久]・蒔田権佐[広定]　此五人
被仰付　過半出来申処　同二月十日丙丑
時者午未之間　於奥院　昔慈心坊尊恵
閻魔王宮通十万部御経之導師　其
通路之上石塔有　自其下一尺五寸四方
湯口　俄出来　熱塩湯涌出矣　湯玉之立
事一尺五寸余　譬大雨之後　俄如高水
流堀穿陸地　諸人警目消肝計也　急
奏問申処　即為上意　増田右衛門尉[長盛]・稲葉兵庫[重通]
頭来入有御覧也　有様被仰上矣　主君大
開喜悦眉　如先年望　薬師如来所示
是也　則右之五人之奉行衆被仰出様　彼
再興所被止其普請　新湯之所可立之　其
跡之地　彼六十五間[軒]之本主皈之　令悦与御
諚有而　石川紀伊守・服部土佐守[正重]・宮木長次[豊盛]

『有馬温泉史料』には慶長の大地震によって倒壊した湯山御殿修理費用明細の古文書がひかれており、これによって倒壊した御殿には化粧の間・湯殿・雪隠・湯屋・数寄屋などがあり、地震後さらに仮の御殿・新湯仮の湯屋・馬屋などの建てられたことが知られます。

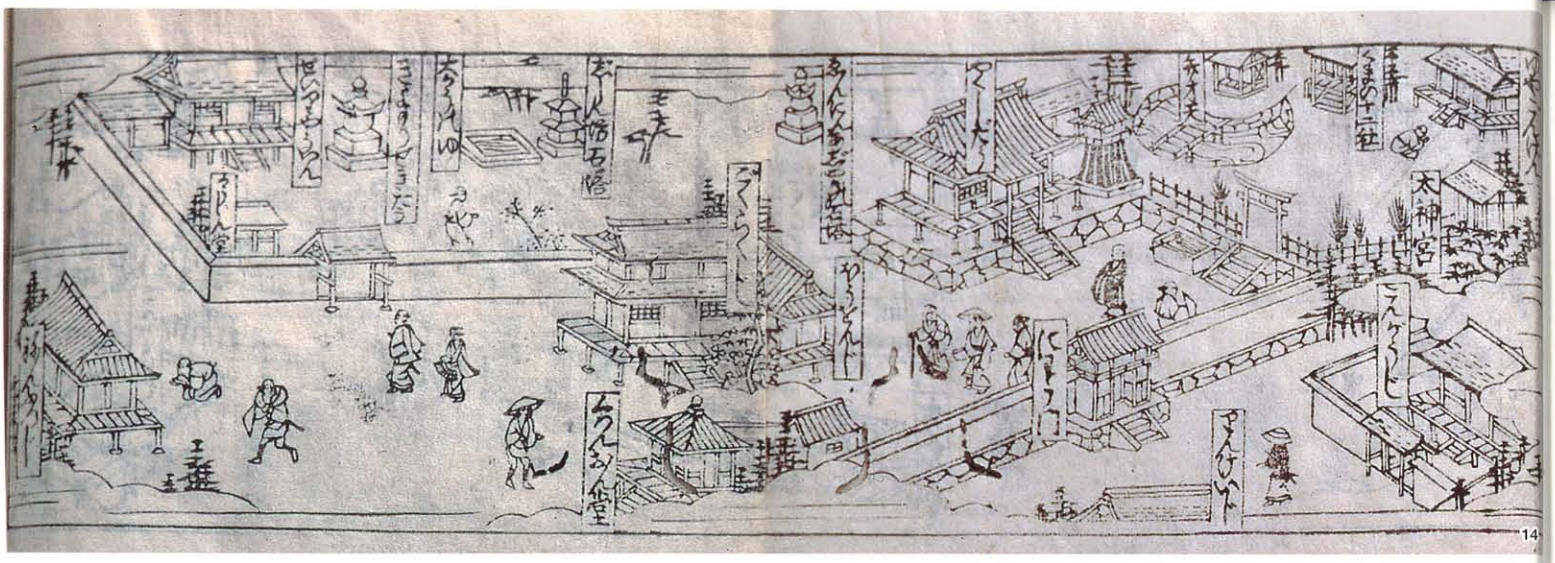
（前略）右之はらひ
一、弐百拾四石二斗六升　湯の山御うへ御殿、大ぢしんニそこね申し候を、つくろい申入用
一、三拾七石弐斗六升　同所御化しやうの間、つくろいの入用
一、拾九石弐斗三升　同所御湯殿の、つくろい入用、
一、拾九石壱斗　同所御せつちん、つくろいの入用、
一、拾八石七斗　同所御ゆやの、つくろい入用、
一、拾四石一斗六升　同所御すきやの、つくろい入用、
一、六石三升　上様湯治被成候ニ付、かりの御殿立申候入用、
一、八石三斗　右材木入置申候小屋之入用
一、拾石七升　御くみ湯の樽の入用并人足飯米、小日記ニ在之、
一、拾八石弐斗壱升　新湯かりのゆや、同ゆのわき候水船之入用
一、弐拾五石六斗三升　同所御馬や弐間半ニ五間半之入用　（後略）

12. 摂州有馬湯山御蔵米御算用状（湯山町古文書　『一話一言』所収）

ただし、地震後新たにつくられた湯屋に秀吉は入っていません。湯山御殿が再建された慶長三年(1598)は秀吉の没年にあたります。この年の五月には再興なった湯山御殿へ湯治に出かける予定でしたが、秀吉の体調の悪化や天候不順のため果たせず、八月にはついに亡くなってしまいます。今回検出された湯屋遺構は、秀吉専用の湯屋としてつくられたものではあるが本人は入ることがなかった、ということになります。

回数	期　　間	備　　考
1	天正11年(1583) 8 月17日～ 8 月27日	4 月賤ケ岳合戦
2	天正12年(1584) 8 月 2 日～ 8 月 8 日	8 月 8 日大坂城新亭に移る
3	天正13年(1585) 1 月22日～ 2 月 3 日	3 月正二位・内大臣　7 月従一位関白
4	天正13年(1585) 9 月14日～ 9 月20日	7 月四国平定
5	天正18年(1590) 9 月25日～10月14日	7 月小田原攻め　天下統一
6	天正19年(1591) 8 月17日～ 8 月18日	1 月秀長没　2 月利休自刃　8 月 5 日鶴松夭折
7	文禄 2 年(1593) 9 月27日～閏9月7日	6 月対明講和　8 月拾（秀頼）誕生
8	文禄 3 年(1594) 4 月29日～ 5 月17日	2 月吉野花見　3 月伏見城に入る
	文禄 3 年(1594)	町屋65軒を退去させ湯山御殿を造成させる
9	文禄 3 年(1594)12月 8 日～12月14日	落成湯山御殿に　8 月伏見城竣工
	文禄 4 年(1595)	1 月草津温泉に御座所を造成させる
	慶長元年(1596)閏 7 月12日	慶長大地震、湯山御殿大破
	慶長 3 年(1598) 2 月10日	温泉寺奥ノ院付近で新湯が湧き出る
	慶長 3 年(1598)	新湯に仮御殿・仮湯屋・馬屋などを造らせる
	慶長 3 年(1598) 5 月 8 日	新湯湯屋に湯治の計画、病気のため果たせず
	慶長 3 年(1598) 8 月18日	秀吉没

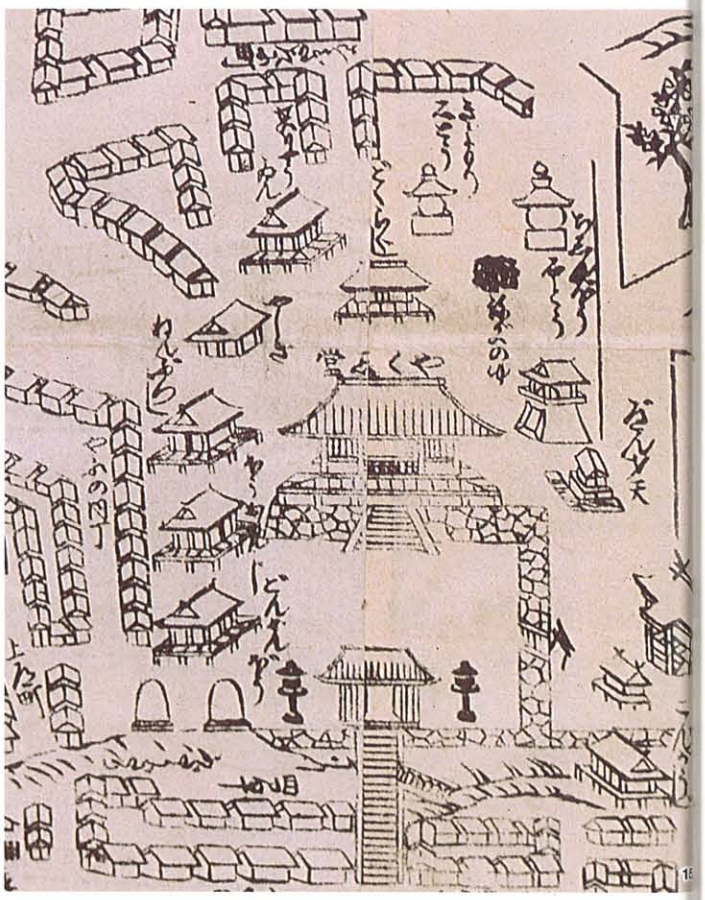
13. 秀吉の有馬温泉入湯一覧

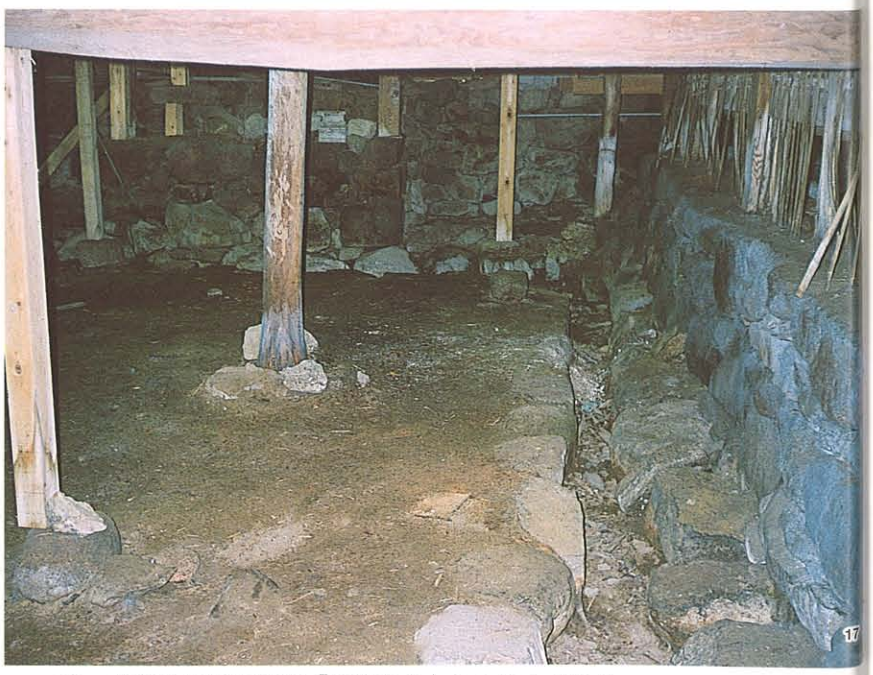


14. 『有馬山温泉古由来』（享保二年〔1717〕神戸市立中央図書館蔵）にみえる「大かうのゆ」

15. 『有馬山絵図』（宝永七年〔1710〕神戸市立中央図書館蔵）にみえる「ねがひの湯」

この泉源は後に湯の涌出が止まってしまうが、その場所は名所となっていたようで、宝永七年(1710)年版行の『有馬山絵図』には「ねがひのゆ（願いの湯）」（15写真）、享保二年(1717)の『有馬山温泉古由来』には「大かうのゆ（太閤の湯）」（14写真）として記載されている。地元では現在までも極楽寺・念仏寺の境内が秀吉の湯山御殿あとであり、極楽寺庫裏奥の床下にある石組みの壁をもつ地下室が湯殿あとであると言い伝えられてきた。ちなみに現在の極楽泉源は、昭和二十九年、新たに開削されたものである。





16. 極楽寺庫裏床下に「湯殿あと」ＳＸ０１がある

17. 極楽寺庫裏床下の「湯殿あと」ＳＸ０１

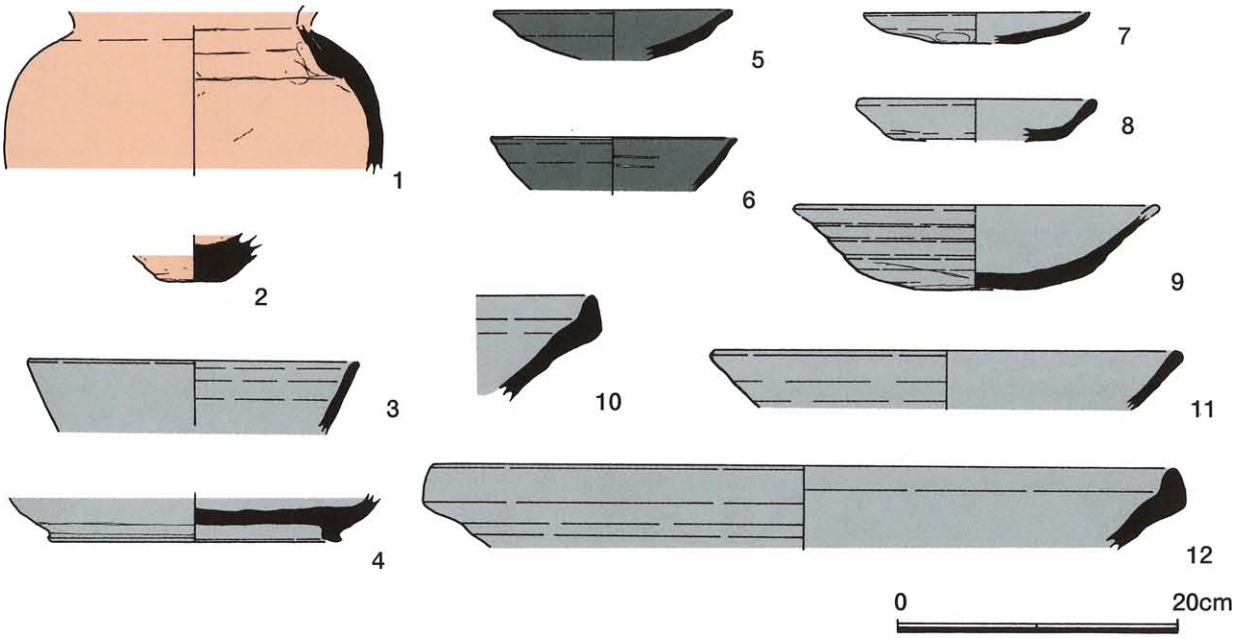
―― 発掘に至る経緯・発掘の経過 ――

平成七年の阪神・淡路大震災によって有馬も大きな被害を受け、極楽寺本堂は修復できましたが、庫裏はかなわず、これを解体し、古い部材を利用して再建することとなりました。庫裏が解体され、「太閤の湯殿」と伝えられる遺構が二百年ぶりに露天となり、これに先立ち発掘調査が行われることになったのです。平成八年末から平成九年十月まで第一次調査を行ない、その後の周辺の調査を含め、現在までに四回の調査を行っています。第一次調査では、三枚の遺構面を面的に調査しました。江戸時代の二枚の火災層が記録に残るとおり確認され、その下層から安土桃山時代、豊臣秀吉の湯山御殿跡が確認されました。さらに一部について下層の截ち割り調査を行い、この下にも遺構面があることを確認しています。第二次調査では湯山御殿造成時の盛り土および石垣、その下層で湯山御殿造成当時の地面・地表土を確認しています。第三次調査は曲輪(くるわ)部分を中心として、第四次調査では現在の極楽泉源付近のトレンチ調査を行いました。すなわち、これまでの調査で確認されたのは、

- 地表面：天明元年(1781)に再建された極楽寺庫裏
- 第一遺構面：安永二年(1773)の火災面［極楽寺］
- 第二遺構面：元禄八年(1695)の火災面［極楽寺］
- 第三遺構面：安土桃山時代～江戸時代初期の遺構面［豊臣秀吉の「湯山御殿」］
- 第四遺構面：安土桃山時代の遺構面［「湯山御殿」以前］

ということになります。伝承どおり湯山御殿の存在が確認されたのは大きな成果と言えましょう。

また、遺構の検出には至りませんでしたが、弥生時代末ないし古墳時代初め・奈良時代・鎌倉時代の土器も出土していて（18図）、このことは周辺にその時代の遺跡が存在することを示しています。文献に見えるように古くから、あるいはそれ以前からこの地が湯治の場として利用されていたことをうかがわせます。

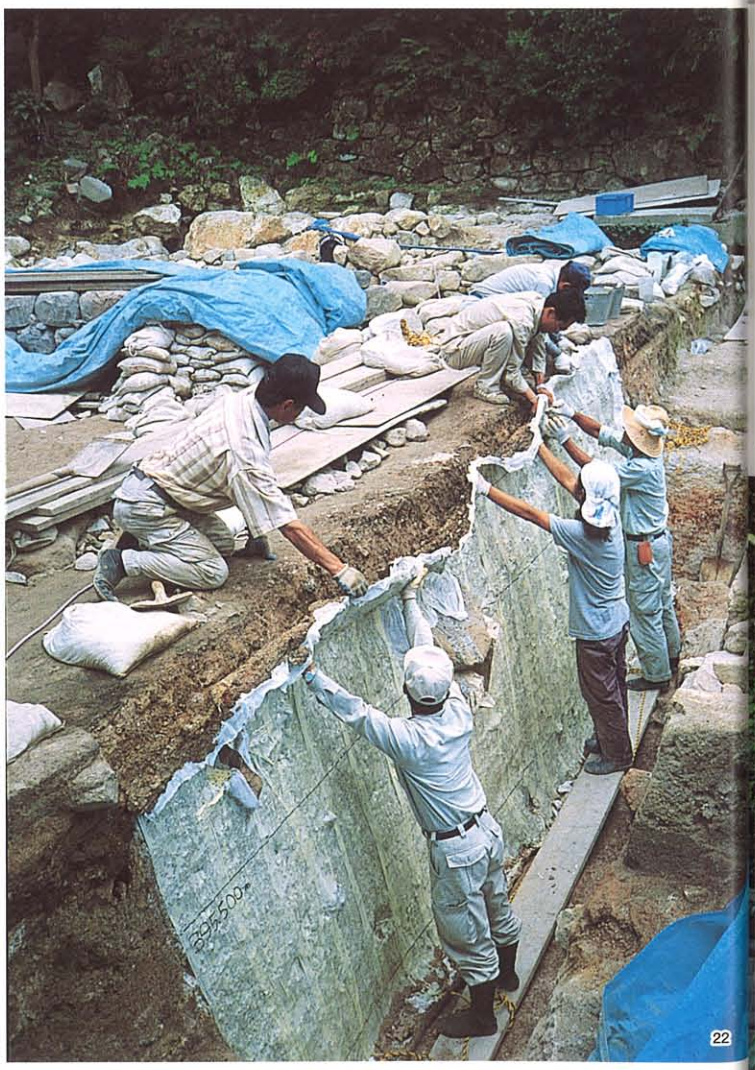


18. 鎌倉時代以前の遺物　1・2：古式土師器？、3・4・7～12：須恵器、5・6：瓦器
1・3：SX01、2：SK55、4・8・10：4層、5・7・12：3層、
6：SK86、9：SD03、11：SW03出土

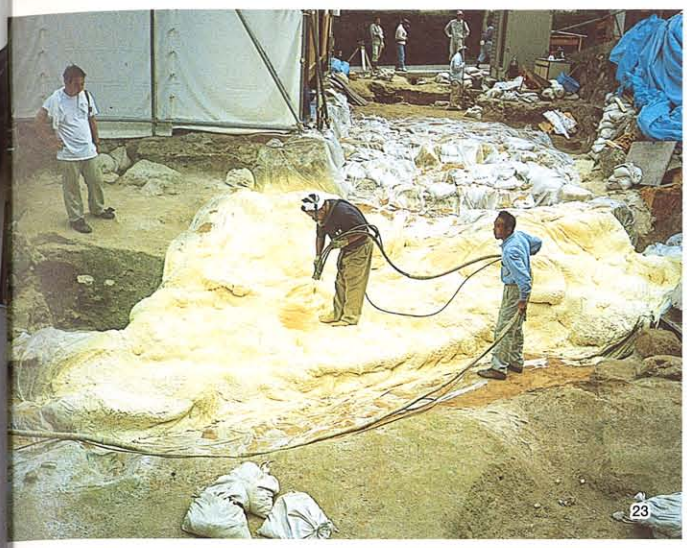
19

20

21



22



19. 震災後の寺町界隈　左温泉寺・中念仏寺・右極楽寺（西から）
20. ＳＸ０１調査風景［第一次調査］
21. ＳＸ１８付近調査風景［第一次調査］
22. 土層転写作業中［第一次調査］
23. ＳＸ０２・ＳＸ２３をウレタンで養生して埋め戻す［第一次調査］
24. 第二次調査地点（南西から）
25. 安土桃山時代造成土截ち割り中［第二次調査］
26. 曲輪石垣ＳＷ０８草むしり［第三次調査］
27. 曲輪石垣北隅部分調査風景［第三次調査］

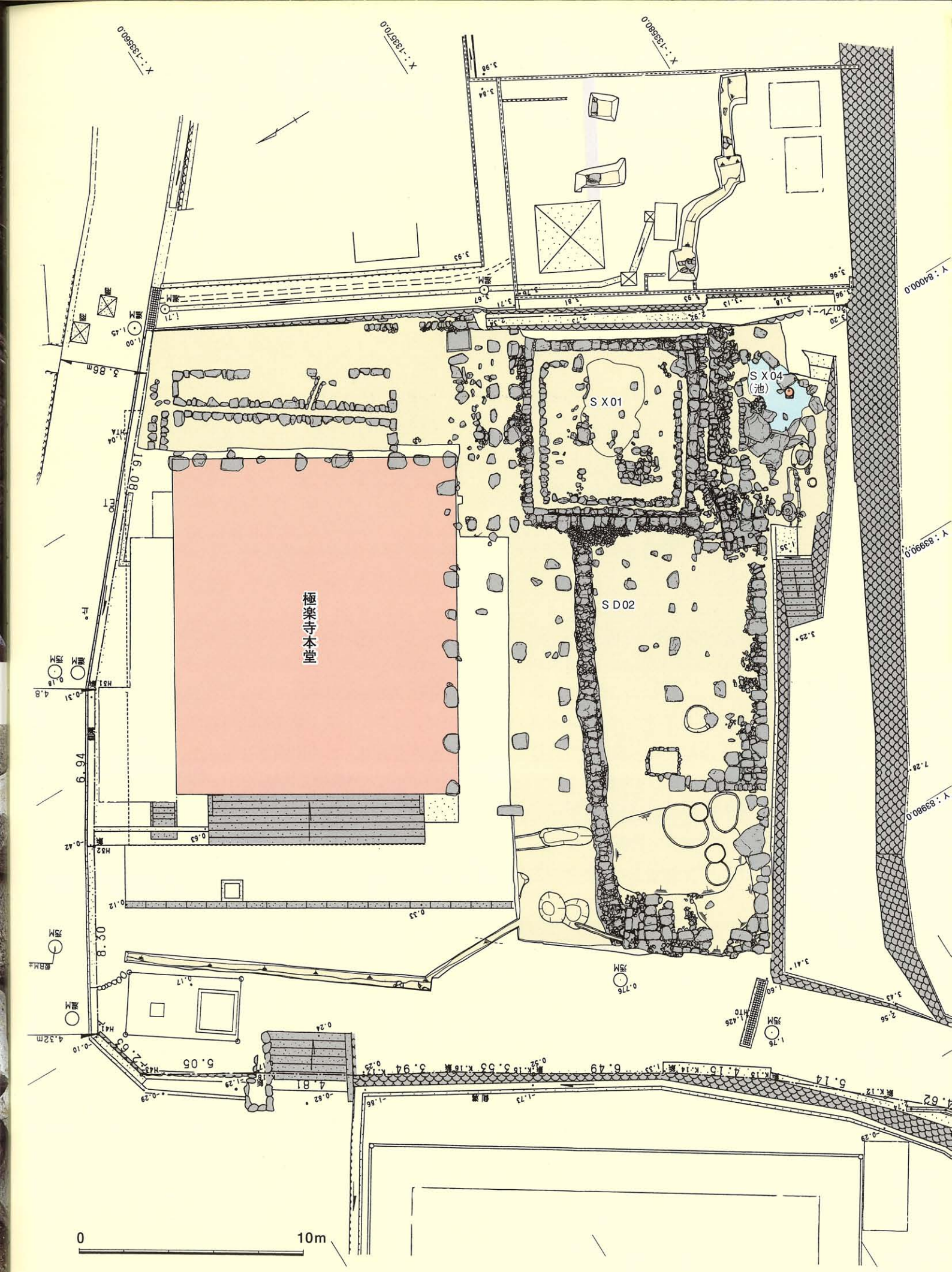
28.　天明元年(1781)再建極楽寺庫裏関連の遺構（北西から）

―― 安永二年(1773)の火災面（第一遺構面）の調査 ――

調査の手はじめとして、庫裏床下にたまっていた塵芥・表土を除去し、天明元年(1781)に再建された現庫裏の礎石などの状況を記録しました。この後、安永二年(1773)の火災面の検出に努めましたが、火災後きれいに後片付けが行われているようで、火災層は一部に残されているだけでほとんど残っていませんでした。また、礎石等の遺構も確認できませんでした。宝永七年(1710)年版行の『有馬山絵図』・元文二年(1737)版行の『摂州有馬細見図独案内』・寛延二年(1749)の『有馬景勝図』などを見ると、極楽寺は本堂のみで庫裏は描かれていません。天明元年(1781)の庫裏建設以前、ここは空き地であったようです。

これらの絵図に「ねがひのゆ（願いの湯）」として描かれているのが、これまで太閤の湯殿あとと伝えられた石組み遺構ＳＸ０１（＝遺構番号、以下同様）です。この遺構の床面南東寄りに4.5ｍ×2.5ｍの大きな穴を埋め立てた跡が確認されました。この穴が湯ぶね跡か、と期待しつつ調査を進めましたが、この大穴からは石や茶碗のかけら、江戸時代後期の瓦などが大量に

29.　礎石には「極楽寺入用」などの墨書がみえる



30.　天明元年(1781)再建極楽寺庫裏関連の遺構

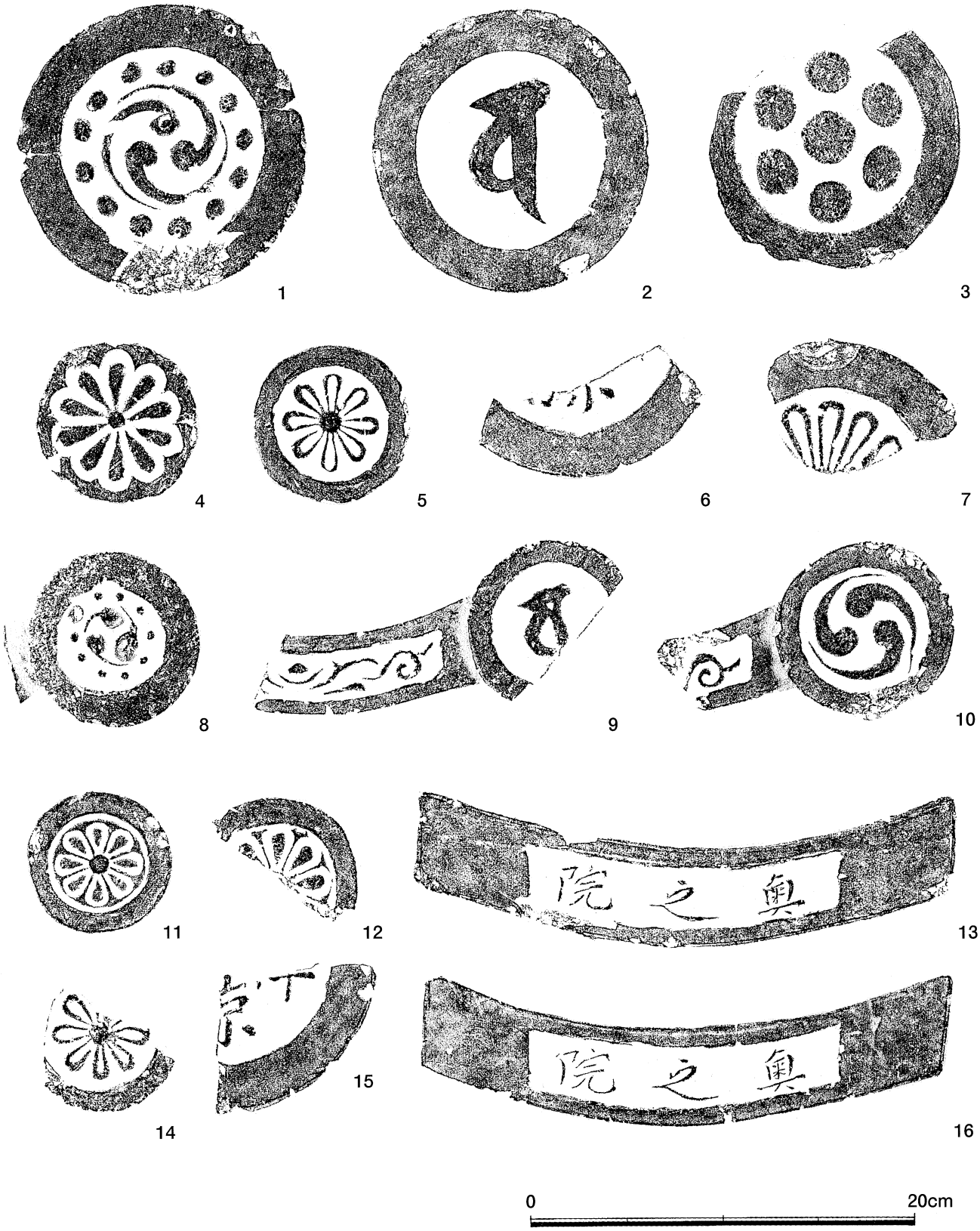
31. ＳＸ０１全景（北西から）

出土しただけでした。結局この穴は安永二年(1773)の火災時に出た瓦礫を捨てるためのゴミ穴（廃棄土坑）でした（32写真）。ＳＸ０１は割り石が用材に使われているなど、安土桃山時代の石積みとしてはふさわしくない様相もみられますが、後世の積み直しの可能性もあり、この段階でＳＸ０１が太閤の湯殿跡であるのか、違うのかという判断はつきませんでした。ＳＸ０１北西辺の石垣最下には石組みの排水溝が開口していて、この排水溝は北西方向に石組みの暗渠となってのびています（ＳＤ０２）。

このほか泉源付近（第四次調査地）で検出された廃棄土坑からも多量の瓦が出土していて、軒平瓦に「奥之院」の銘の入ったものがみられます（34図）。

32. ＳＸ０１内廃棄土坑の瓦堆積状況（北から）

33. 第四次調査地点トレンチ全景（北西から）



34.　第一遺構面およびそれ以降の瓦拓影

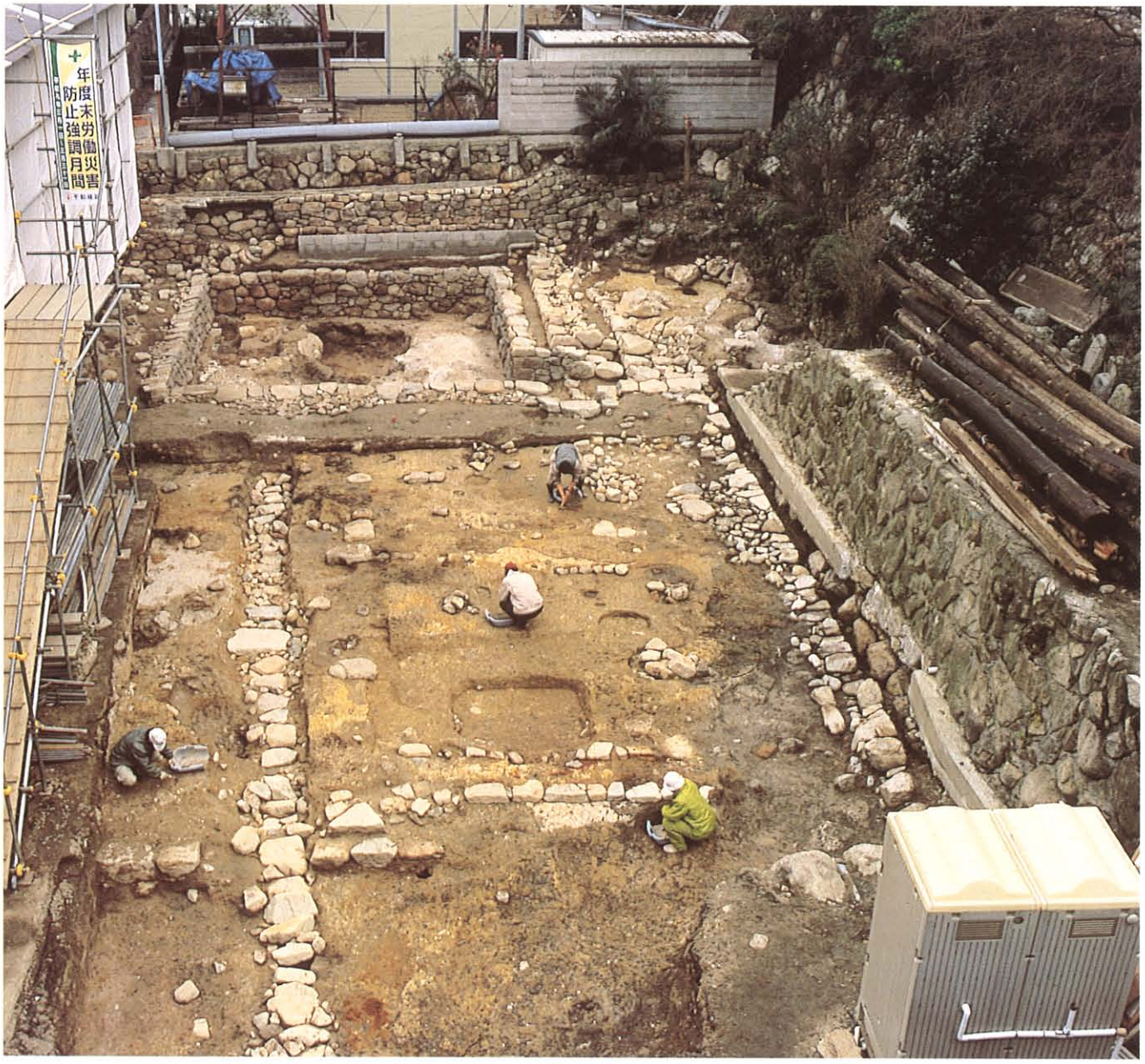
1～3・6・14：軒丸瓦、4・5・11～13：菊丸瓦、8～10：桟瓦、7・15・16：軒平瓦

1・2・4・9・10：ＳＸ０１、3・5・8：ＳＤ０４、6：１層、7：ＳＸ０５、11～16：第四次調査地廃棄土坑出土

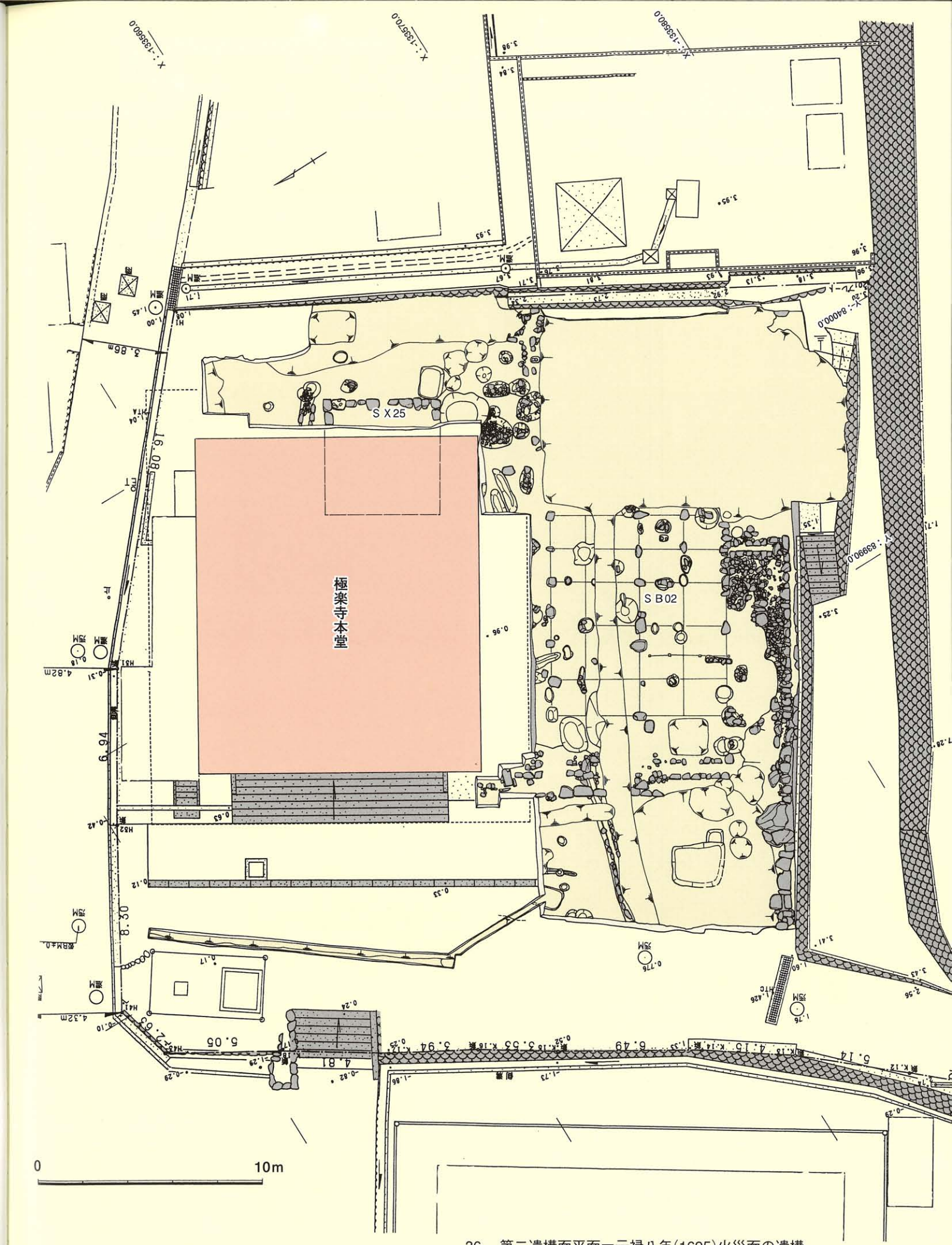
―― 元禄八年(1695)の火災面（第二遺構面）の調査 ――

第二遺構面の上には焼土や炭を多く含む火災層が厚さ10～20cm堆積していました。この層から出土する遺物は十七世紀のものが多く、この火災層は元禄八年(1695)、湯山を焼き尽くした大火の際のものであると考えられます。什器等を持ち出す暇もなかったようで、当時の生活用品が多量に残されていました。食器類は同じ形、同じ模様の皿や茶碗がかたまって出土しており、セットの食器類が箱に入ったまま焼け落ちたものと推測されます。錫杖・仏具・竿秤のおもり・キセル・寛永通宝などの銅銭など、金属製品も多く出土しています。火災時の熱で融解してしまったものも多く、火災の物凄さを示しています。なお、極楽寺には火除（ひよけ）観世音と呼ばれる金銅仏があり、これは火災後、焼け跡の熱灰中から回収されたものだと伝えられています。この遺構面では建物跡と石段、石組みの溝等が確認されました。湯山御殿が解体、整地されたあと、江戸時代初めに建立された極楽寺の遺構と考えられます。什器や焼け米などが集中して出土していることから、本堂よりは庫裏である可能性が高いと思われます。

さて、問題のＳＸ０１ですが、南西の一辺を除き、他の三辺はこの元禄八年(1695)の火災層を掘り込んで積まれていることが判明しました。つまりこの遺構が秀吉の湯山御殿とは関わりのないことがはっきりしたわけです。しかし、この後この石垣の下から湯殿関連の遺構が確認されることになったのです。

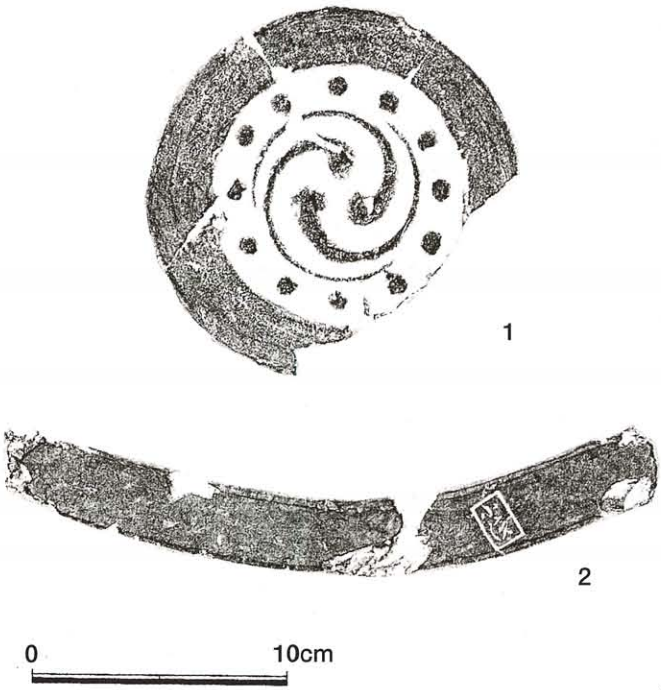


35.　第二遺構面　元禄八年(1695)に焼失した極楽寺の建物礎石・石段等の遺構（北西から）



36.　第二遺構面平面＝元禄八年(1695)火災面の遺構

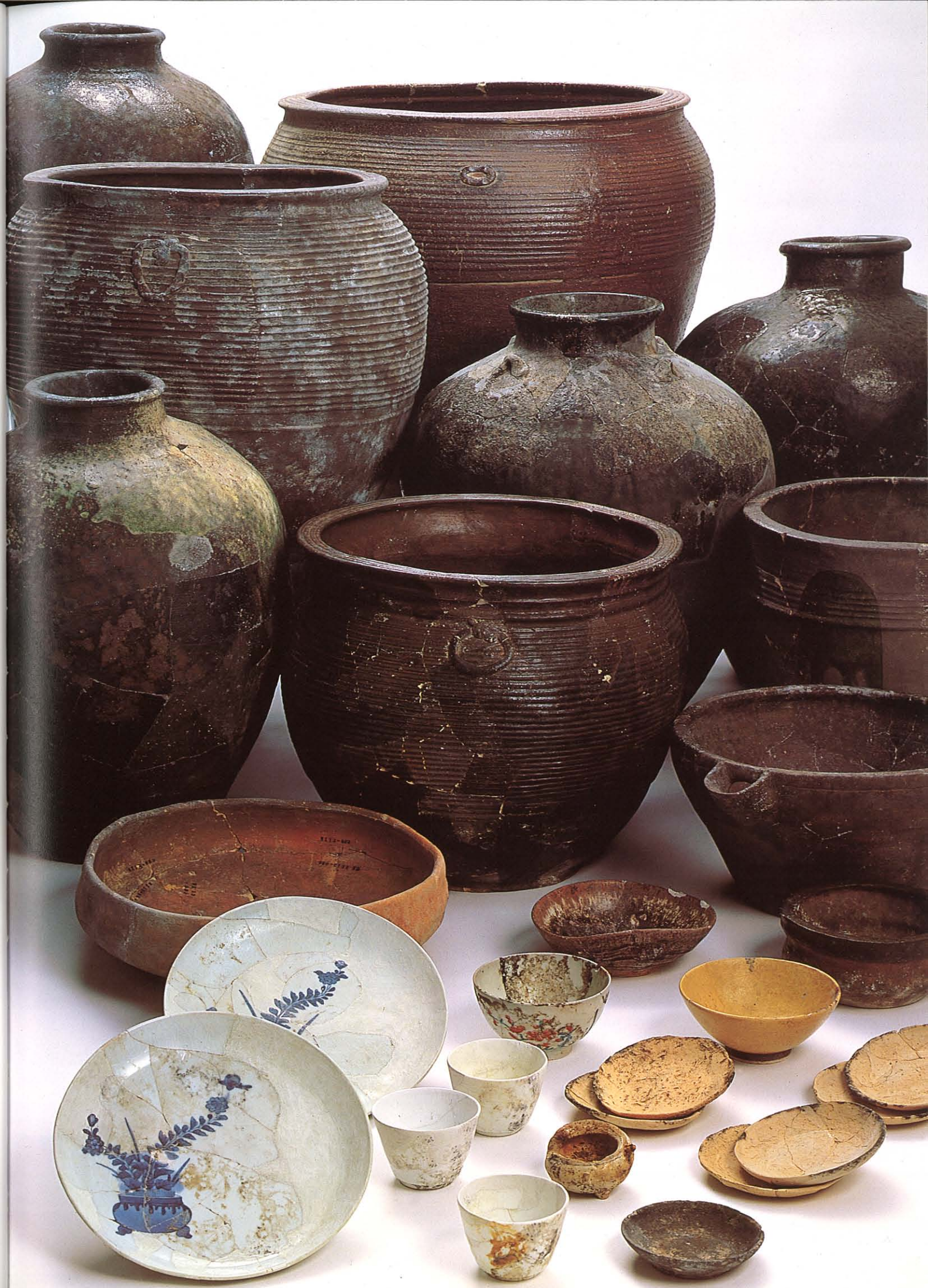
37. 元禄八年(1695)の地面（南東から）　焼け焦げており、この上に焼土層が約20cm堆積していた。
38. 同焼け米の出土状況（西から）



39

40

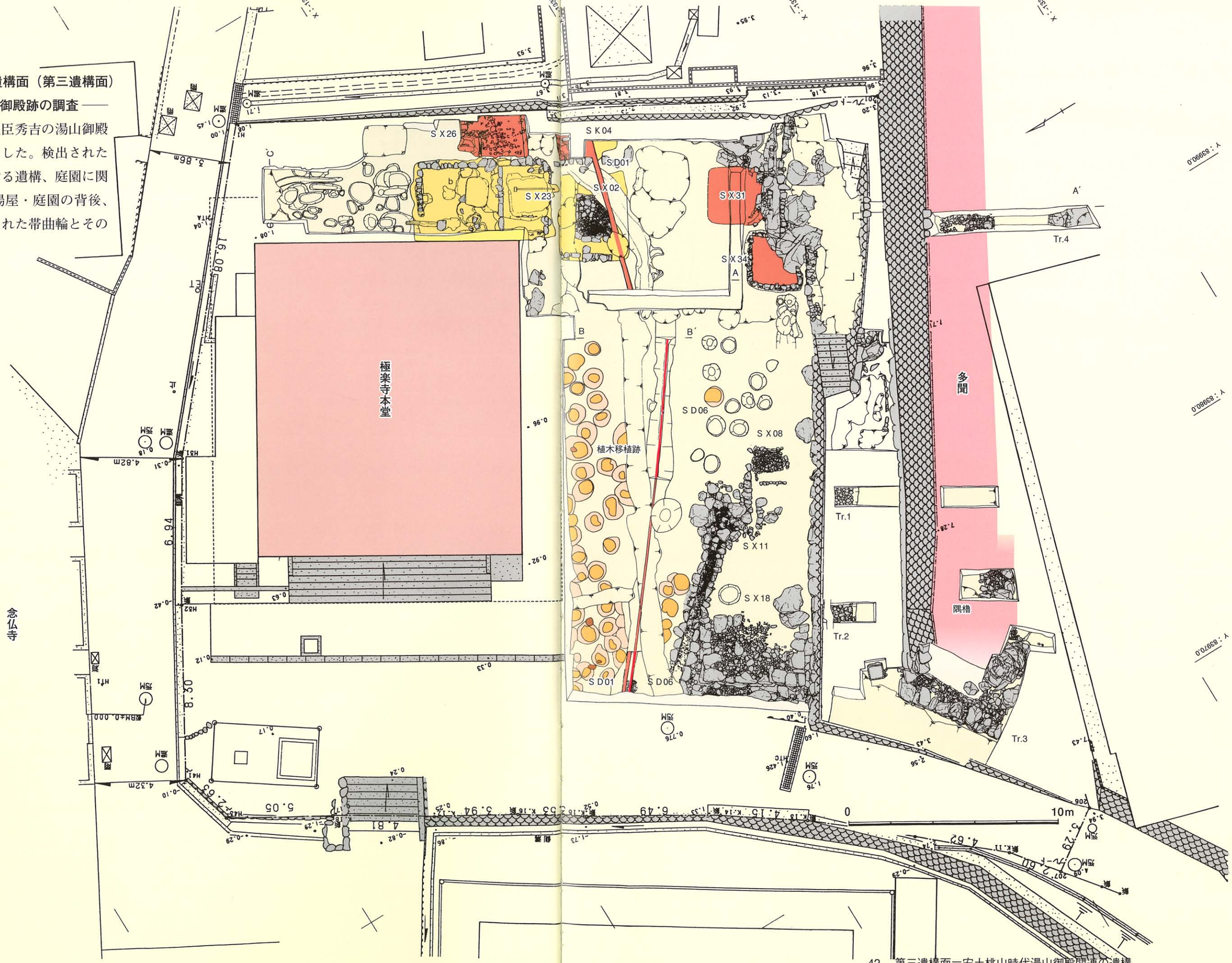
39. 元禄八年(1695)の火災層から出土した瓦拓影
40. 元禄八年(1695)の火災層から出土した金属製品
（左下錫杖の長さ10.2cm）



41.　元禄八年(1695)の火災層から出土した陶磁器類　左手前皿直径20.3cm

安土桃山時代の遺構面（第三遺構面）
＝湯山御殿跡の調査

第三遺構面では、豊臣秀吉の湯山御殿跡の一部が確認されました。検出された遺構には湯屋に関連する遺構、庭園に関連する遺構、そして湯屋・庭園の背後、愛宕山の山腹に造成された帯曲輪とその石垣などがあります。



42. 第三遺構面＝安土桃山時代湯山御殿関連の遺構

43. 第三遺構面＝安土桃山時代湯山御殿関連の遺構（モザイク写真）

44. 蒸し風呂遺構二種（南西から）　手前のＳＸ０２は床に砕石を敷きつめるタイプ。
奥のＳＸ２３は砕石がなく、床下に蒸気をひく配管がある。

―― 湯屋に関連する遺構 ――

湯屋に関連する遺構には、蒸し風呂・泉源・湯溜め・湯をひくための樋（＝パイプ）・岩風呂などがあります。すべての遺構が同時に存在したものではありませんが、水風呂（＝湯につかる風呂）・蒸し風呂と種類の異なる風呂が同時に存在したと考えられます。

蒸し風呂　ＳＸ０２・ＳＸ２３の二つがあります。別府鉄輪温泉など現在あるものや記録に残る蒸し風呂の構造とこれらの遺構を比較すると、

①一坪程度の床面積であること

②半地下式であること

③蒸気を引き込むパイプがあること

④床面に石敷きあるいは簀の子をもつこと

などが共通する要素としてあげられ、これらは蒸し風呂であると推定されます。床面に有馬温泉の湯の特徴である湯垢＝酸化鉄の沈殿が認められないことから、湯をためた湯ぶねであるとは考えられません。ただし、同じ蒸し風呂ではあっても床下に配管がないタイプで床面の粘土上に砂利が敷かれるもの、床下に竹製のパイプを配して蒸気を引き込むタイプとその構造に違いのあるのは興味ぶかいことです。

45. 別府鉄輪温泉の蒸し風呂
（『太陽』no.152から転載　吉田一夫氏撮影）

ＳＸ０２　ＳＤ０１・ＳＤ０３・ＳＸ０１などと切り合い関係にあり、いずれよりも古いものです。ＳＸ０１によって南西2/3は床面を残し大破、ＳＤ０３によって床面南隅を壊されています。

ＳＸ０２の掘り方は一辺４ｍ程度の隅円方形で、地表面から約１ｍ掘り下げられ、底面に黄色粘土が敷かれています。ここに一辺30㎝程度の亜角礫を内法で1.9ｍ×1.9ｍの方形に並べ、この上に蒸し風呂の建屋がのります。したがって蒸し風呂の床面積はおよそ一坪ということになります。掘り方と浴室壁の間には裏込めとして黄色粘土と灰色シルト交じり砂が交互に詰められていますが、遺存状況の比較的良かった浴室の北東辺では裏込めの粘土が面的に直立して検出されていて、枠石の上に有機質の、おそらくは板壁が立っていたものと推測されます。

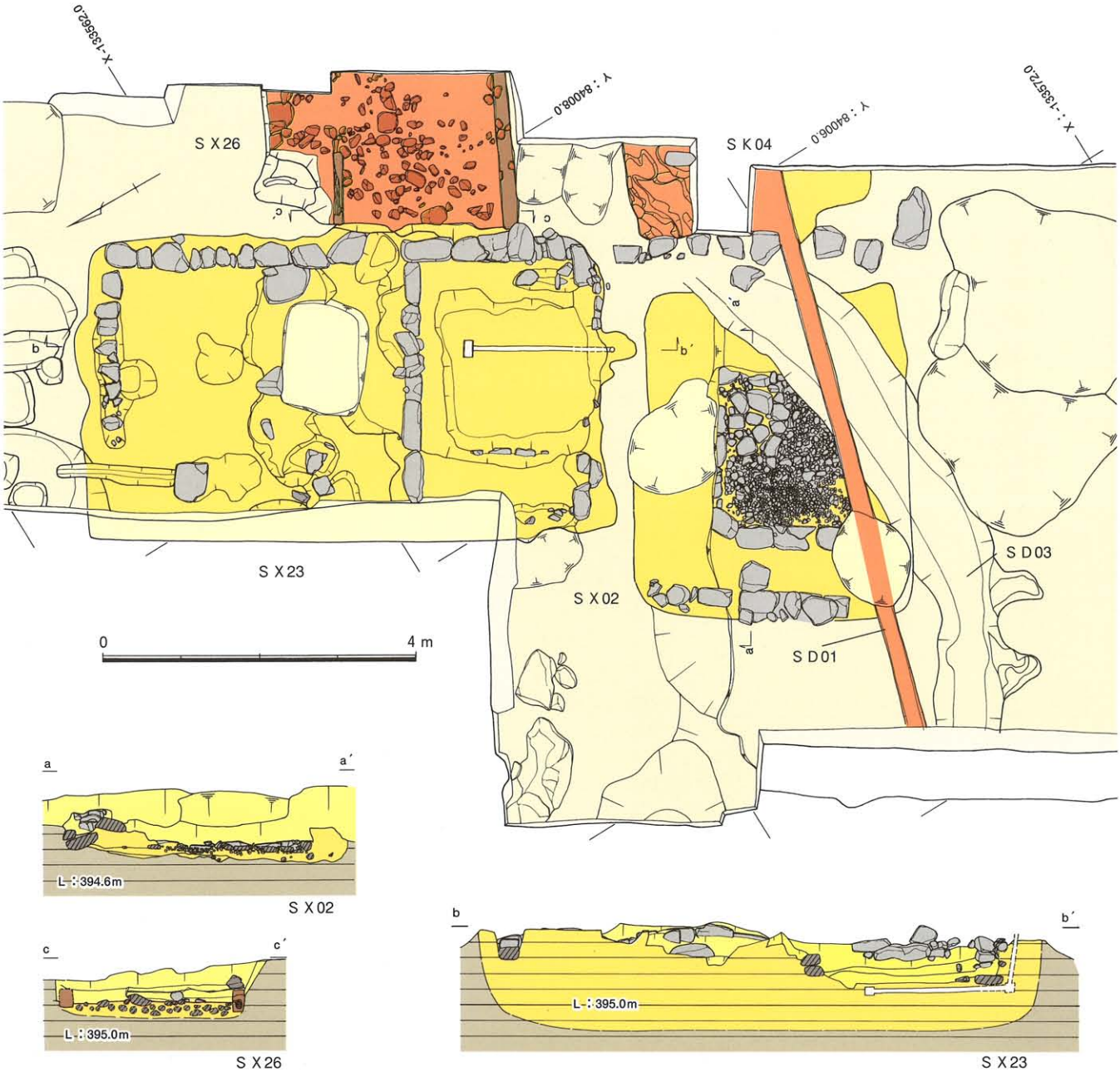
蒸し風呂内部の石敷き上面は第三遺構面からの深さが約80㎝あり、半地下式の構造になっています。浴室の床面、黄色粘土上には砕石状の角礫が敷きつめられていますが、東角にあたる1/4には一辺20㎝程度のやや偏平な石がおおかた正方形に並べられています。この床面敷石の間にたまっていた灰色粘土に人間の頭髪・体毛が遺存していました。

46. ＳＸ０２上屋構造の復元

ＳＸ０２の北西側には北西辺へ下るスロープがあり、これが半地下式の蒸し風呂への入口であろうと考えられます。入口となっているためＳＸ０２の北西辺は他の三辺と裏込め構造が違っていて、ここだけ石列が二列になっています。外側の石列も浴室内側に面を向けて積まれ、両石列の間には黄色粘土が充填されていました。

なお、攪乱をうけた断面等に床下へのびる配管は確認できませんでした。入口や泉源のある方向から考えると、蒸気は南東の壁面から引き込まれていた可能性が高いと思われます。

遺構を埋める土砂は流水にともなう砂およびシルトの互層で、中国漳州窯系青花・備前焼花生が出土しています。



47. 蒸し風呂および周辺の湯屋関連遺構

ＳＸ２３　ＳＸ２６・ＳＫ０４・ＳＤ０１などと同時に作られたもので、ＳＸ０２よりも新しい遺構です。ただし両者に時間的な間隙はほとんどないと思われ、ＳＸ０２の作り替えがＳＸ２３であると考えられます。

全体としては6.8ｍ×4.0ｍの長方形土坑に黄色粘土を詰め込んだ遺構で、ぐるりに一辺20～40㎝の礫が粘土床面に上面をあわせて並べられています。南西1/3ほどのところに内部を区画する石列があり、その南西側が二段に下がる掘り込みをもつ蒸し風呂になっています。一段目は約2.0×約3.0ｍの広さで、黄色粘土の平坦面になっていて、この上面に酸化鉄がわずかに沈着しています。その中央が約1.9ｍ×約2.0ｍの範囲でさらに一段下がります。ここには枠状の石が一部残りますが、一段目のような黄色粘土のきれいな敷きつめは認められず、ＳＸ０２のような砕石敷きもありませんでした。堀り込み底の深さは約70cmありますが、この二段目の床下８cmのところで埋め込み式の配管あとが確認されました。管自体は残っていませんでしたが節の痕跡が埋め込まれた土に残っていて、直径約６㎝の竹であることを確認できました。この竹樋はＳＸ２３の南西辺をほぼ垂直に下がり、直角に曲がって床下を約1.7ｍ這い、その先が20㎝×10㎝の長方形の枡につながるというものです。この竹樋にも酸化鉄の沈着は認められず、湯ではなく蒸気を通したものであると考えられます。

この遺構を埋める土砂中から丹波焼四耳壺（しじこ）・同すり鉢・同徳利・瀬戸美濃焼天目（てんもく）茶碗・志野焼向付（むこうづけ）（灰吹（はいふき）として転用）・龍泉窯（りゅうせんよう）系青磁印花文（いんかもん）皿等が出土しています。

48.　蒸し風呂ＳＸ２３（南東から）

49.　ＳＸ２３床下の蒸気をひく配管跡（北東から）

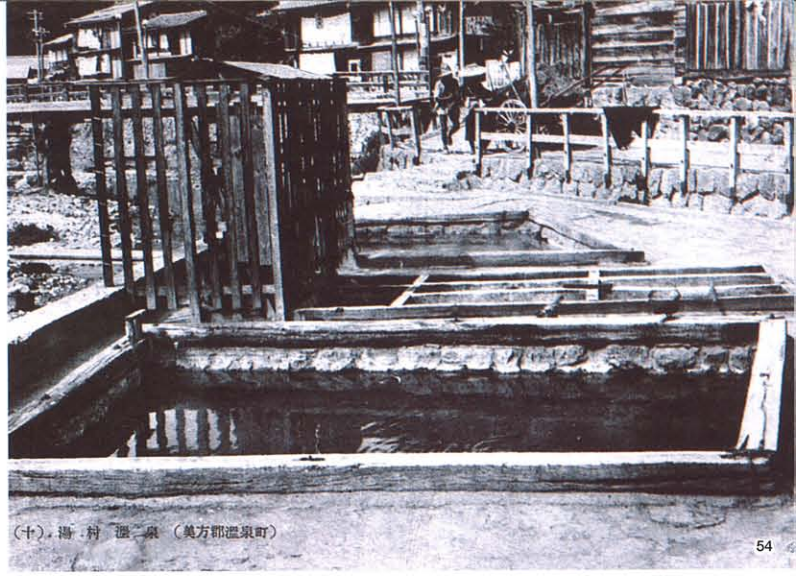
50. 泉源ＳＸ２６（南東から）
51. 樋ＳＤ０６（北西から）　沈殿した湯垢（酸化鉄）が遺存している。
52. 樋ＳＤ０６［左］と樋ＳＤ０１（南東から）　同じ堀り方内に平行して据えられている。

―― 泉源・樋 ――

ＳＸ２６（泉源）・ＳＫ０４（湯溜め）　蒸し風呂ＳＸ２３南東辺の石列を共有し、これと同時に存在したことが確認できました。

ＳＸ２６は角材を井桁状に組み、底に拳大の石を敷きつめた方形の遺構で、約3.0ｍ×2.1ｍ以上（遺構が調査区外に続くため、以下同じ）をはかります。遺構面から石敷き上面までの深さ約60㎝で、底面の標高は395.45ｍとなります。北東辺には枠の角材が一部残存していました。他の二辺にも枠材の痕跡が残っていて、この遺構には幅約15cm・高さ20cmの角材が枠としてはめこまれていたことを確認できました。枠の内法は約2.0ｍ×1.4ｍ以上となります。底面に見えている石敷きはこの枠材を置いた後に置かれています。

石敷きはべっとりと酸化鉄に覆われていて、ここに湯がためられていたことが明らかです。壁にも酸化鉄の沈着があり、これにより湯の深さが敷石上面から５～７㎝（標高395.52ｍ）であることが判明しました。湯の深さが10㎝に満たないことから、この遺構は湯ぶねとは考えられません。温泉の泉源を木枠で囲い、ここに礫を入れるという同様の施設が現在の温泉地に見られ（53～56写真）、この遺構も同様で泉源と思われます。



各地の泉源　53. 兵庫県湯村温泉、54. 兵庫県湯村温泉〔昭和初期？〕、
55. 和歌山県湯の峰温泉、56. 群馬県草津温泉

ＳＸ２６にとなり合うＳＫ０４は湯を溜める施設と思われます。凸凹のある黄色粘土の底面にはＳＸ２６ほどではありませんが酸化鉄が沈殿しています。底面に石敷きはありません。内法で2.1ｍ×1.2ｍ以上をはかり、深さは現状で約35cm（底面の標高395.07ｍ）です。底面に厚く貼られる黄色粘土を一部截ち割りしたところ、中に材木の切れ端などが混入していました。

この南隅から木樋ＳＤ０１が温泉寺の方向へ伸びています。樋は幅約20cmほどの断面方形のもので酸化鉄の沈殿がわずかに認められます。樋口の底面レベルは標高395.19ｍです。ＳＸ２６・ＳＫ０４・ＳＤ０１は源泉から湯をひくための一連の施設と考えられます。このほかもう一本、湯を流した樋ＳＤ０６があります。これも木樋自体は遺存していませんが、内部に沈殿した酸化鉄や樋を埋めた痕跡が明瞭に残っていて、埋め込まれたこの樋が内法幅13㎝の断面方形、用材の厚み約３㎝であることを確認できました（51写真）。

両樋はともに暗渠となっていて湯山御殿庭園内を横断し、途中でぶつかり、そこからは二つが並んで北西の温泉寺方向にのびています。土層断面の観察からも同じ掘り方内にＳＤ０１とＳＤ０６が設置されていることが確認でき（52写真）、この両者は違う泉源からひいた湯を同じ地点へひく施設と考えられます。ＳＤ０１にあまり酸化鉄の沈殿が見られないのに対し、ＳＤ０６には４cm以上沈殿していて、両者の泉質に違いのある可能性が考えられます。なお、『有馬縁起』には、秀吉が地元の人々や湯治客も新湯を利用できるように湯を樋でひかせ、その長さが七十五間あったという記述があり、これらの樋はあるいはこれに対応するものかも知れません。

57. 自然の岩盤を利用した岩風呂ＳＸ３４〔手前〕とぐるりが石積みの岩風呂ＳＸ３１（北西から）
ＳＸ３１はＳＸ０１によって半分以上がこわされている。

岩風呂　ＳＸ３１とＳＸ３４の２つがありますが、両者は同質の土で埋め立てられいて、二つが共存していたと考えられます。ともに湯につかる水風呂（すいぶろ）としての岩風呂です。なお、後世の攪乱が多くはっきりしませんが、この岩風呂を囲う建物の存在を示すような礎石や柱穴などは確認されませんでした。露天風呂で、目隠しをするにしても入浴ごとに幕をはる程度ものであったのでしょうか。

ＳＸ３１　ＳＸ０１によってその北東半が削平され、石積みも崩されていてわずかを残すのみです。石積みで枠を作るプラン方形の岩風呂で、深さは65cmをはかり、遺存している南西辺で内法が2.1ｍほどと考えられます。底に石敷き等はなく、基盤層の凝灰岩が風化した砂が底面になります。底面には硬く酸化鉄が沈着していました。また、南東辺側でＳＸ３１に湯をそそぐための樋の痕跡が確認されました。

ＳＸ３１を埋め立てる土のなかから、青織部向付・丹波焼すり鉢・唐津焼皿などが出土しています。

ＳＸ３４　ＳＸ０１によって一部石組みが崩されていますが、おおかた旧状を保っています。石積みで枠を作るプラン方形の岩風呂ですが、南隅は基盤層の凝灰岩の岩肌をそのまま利用しています。樋でひかれた湯がこの岩肌の裂け目を伝って湯ぶねに流れ込む造作になって、滝湯とでもいうものになっています。内法で一辺2.1ｍ、深さ65cmをはかります。これも底に石敷き等はなく、基盤層の凝灰岩が風化した砂が底面になります。底面には硬く酸化鉄が沈着していました。遺構内から軽石が出土しています。

北西辺側にはあふれたお湯を流したと思われる素掘りの溝が検出されています。

58.　ＳＸ３１・ＳＸ３４

59. ＳＸ３１（北西から）
60. ＳＸ３１を埋める土の中から織部や丹波焼が出土（南西から）
61. ＳＸ３１に湯をひくための樋の痕跡（北西から）

62.　ＳＸ３４（北から）

63.　ＳＸ３４から出土した軽石　高さ8.3cm・重さ68ｇ

64. 湯山御殿の庭園（北西から）

―― 庭園 ――

庭園部分では池・植木の移植跡・建物の基礎？などの遺構が確認されました。

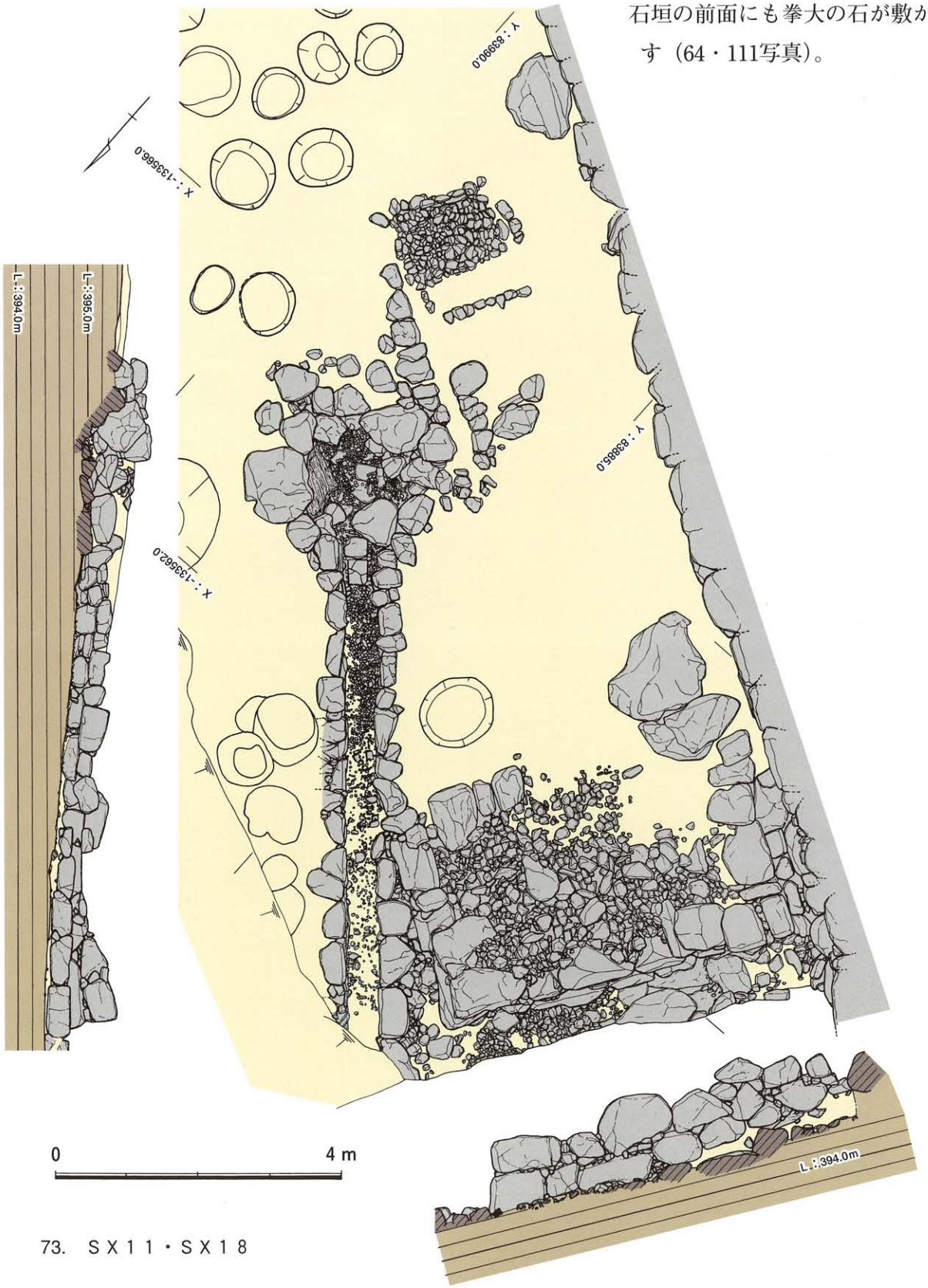
ＳＸ１１　池ＳＸ１１は湯山御殿に葺かれていた瓦と黄色粘土で埋め立てられていたため、比較的良好な状態で遺存していて、導水部・小さな滝をもつ池・排水の溝が一体で確認されています。池の水は山腹から筧（かけひ）のようなものでひいてきたと考えられ、これを方形の石敷き（ＳＸ０８）で受け、石組みの溝を流れた水が小さな滝となって池に流れ込む構造になっています。池部分は石組みの外まわりで直径が約３ｍと小規模ながら、比較的大きな石材が用いられています。石材は地元の白っぽい凝灰岩と花崗岩がほとんどですが、池の石組みの東に接して一辺約１ｍの前石（まえいし）があり、ここから一段池に下りる踏み石には珪化木（けいかぼく）が使われます。池底の中央付近には花崗岩で組んだ浅い凹みがあり、池底全体に青色の砕石が敷かれます。水深はほとんどありません。池の末端で水が一段落とされ、水は石組みの溝を直線的に流れ下ります。池末端で水が落ちる部分には、水を受けるため平瓦一枚が溝底に置かれています。

このような構造をもつ池は茶の湯に使用する水をひき、ここで汲むためのものであると考えられます。前石の上に蹲踞（そんきょ）して滝をながめ、その一段下に据えられた珪化木に下り、池底の凹みの水を汲んだと考えられます。

65.　園池ＳＸ１１の調査（北西から）
　　瓦と黄色粘土で埋め立てられる。
66.　園池ＳＸ１１排水溝を埋め立てる瓦（北西から）
67.　園池ＳＸ１１龍文飾り瓦出土状況（北から）
68.　園池ＳＸ１１桃紋鬼瓦出土状況（東から）

69. 園池ＳＸ１１（西から）
70. 園池ＳＸ１１（北東から）前石の上から滝をながめる。
71. 園池ＳＸ１１（南から）
72. 園池ＳＸ１１（北東から）

ＳＸ１８　ＳＸ１１の排水溝の左岸は石積みが分岐し、これはひとかかえ以上ある石を用いた石垣となってさらに直角に屈曲し、北西に面する石垣へと続いています。後世の攪乱のため全体に遺存状況が悪いのですが、この石垣の対面になると考えられる南東辺の石垣も一部残っています。この石垣間には裏込めの礫が大量に詰め込まれ、これは建物の基壇である可能性、あるいは後に述べます背後の石垣ＳＷ０７とSW０８間のテラス面につづく壇になる可能性が考えられます。しかし、現状ではどちらなのか判断できません。北西辺の石垣の高さは現状で1.3ｍがあります。基壇最上段の石は残されていませんので、本来はさらに高かったと推測されます。石垣の前面にも拳大の石が敷かれています（64・111写真）。

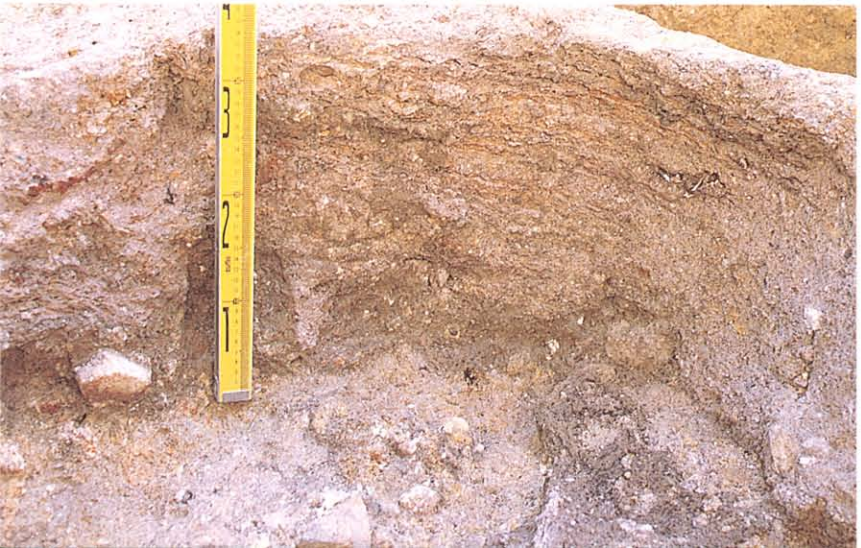


73.　ＳＸ１１・ＳＸ１８

74. 植木移植跡の検出状況（北西から）

植木移植跡　庭園部分では一部を除き調査地の全域にわたって径１ｍ程度の土坑が50以上確認されています。これらの土坑の一部には、植木の根を巻いたと思われる藁縄が遺存しており、その内側にはこの周辺の土とはまったく色調の違う土が詰まっていました。これらは植木の移植あとであると推定されます。採取した土壌について花粉分析を行ったところ、アカマツないしクロマツ・ツガ・アセビないしツツジ・モチノキなどの花粉が確認され、庭園にこれらの植物が植えられていた可能性の高いことが判明しています。

75. 植木移植跡ＳＫ７３・７２の截ち割り状況（北西から）



76. 植木移植跡ＳＫ１０７（北東から）
内側の土を除去すると根巻きの縄が確認された。

77. 石垣ＳＸ０８（北から）
手前はＳＷ０７・ＳＷ０８間のテラス面。

── 石垣と帯曲輪 ──

庭園・湯殿のある平坦面の背後には大きな石材を用いた石垣が延長約70ｍにわたって続いています。高さ約6.5ｍがあり、その中ほどに広い部分で現状幅約3.6ｍのテラスをもつこの石垣は、ツタや雑草に覆われ、また一部が崩れているという状況でしたが、調査にあたり清掃を行ったところ加工した石材を用いない「野面積み」の石垣であることが明確になりました。野面積みという石積み技術は天正～慶長年間に特徴的なもので、この石垣も湯山御殿の建設に伴って築かれたものであることが判明しました。

また、石垣の上面は幅約5～15メートルの平坦面（帯曲輪）となっていてます。テラス面および帯曲輪面の状況を確認するため、トレンチを設定し、確認調査を行いました。その結果、帯曲輪の縁辺では石垣上に巡らされる多聞とよばれる長屋づくりの城壁、帯曲輪の北隅では隅櫓の存在したことが確認され、湯山御殿の構造は重層的なものであることが判明したのです。

石垣・テラス　帯曲輪石垣の長辺、テラス面下の石垣をＳＷ０７、背後をＳＷ０８、ＳＷ０８に続く北西短辺をＳＷ０９とします。ＳＷ０８とＳＷ０９の交わる角度は鈍角で、鎬角（しのぎずみ）となっています。ＳＷ０９は下の二～三段ほどを残して上部は古くに崩れています。ＳＷ０７は近年昭和五十二年にも積み直し修理が行われていますが、過去にも崩落があったようで、発掘で確認した最下段の石は傾いていて前にお辞儀したようなかたちになっていました。現状でＳＷ０７に続く石垣ＳＷ１０は江戸時代に入ってから積まれたものです。

ＳＷ０７の石垣が積み直されているのは明らかですが、截ち割り調査を行ったところ、ＳＷ０７の背後の盛土も、積み直し以前の築造当初のまま残っている部分があり、近年積み直しを行ってはいるものの、ほぼ同じ位置に石垣があったことを確認できました。また、上段のＳＷ０８の石材は庭園面から積まれているのではなく、このテラス上に積まれていて（83写真）、ＳＷ０７・テラス面・ＳＷ０８は安土桃山時代に一連の工事で造成されたものであることが明らかになりました。また、截ち割りを行った範

78.　帯曲輪北角部分（北から）

79. 帯曲輪北角部分（南東から）

囲では地山は確認できず、大規模な盛り土による造成であることも確認されました。

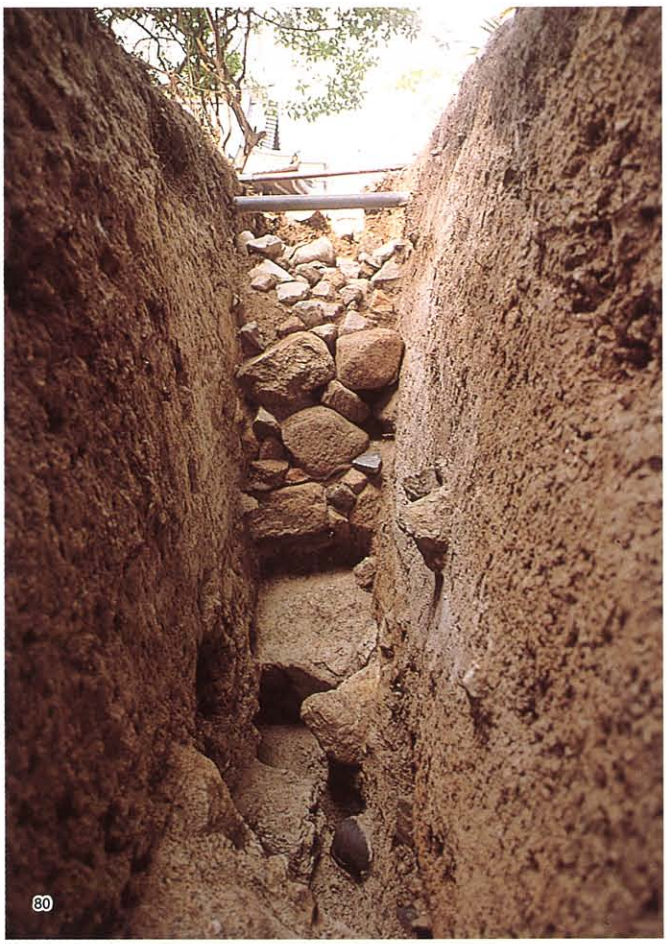
第１・第２・第３トレンチ部分には当初のテラス面がありますが、第４トレンチ部分には当初のテラスが存在しないことを確認しました。現状でも温泉寺寄りの2/3のテラス面は約４ｍで幅広となっているのに対し、奥1/3は約1.0～1.5ｍと狭く、この部分の石垣用材は小ぶりで割り石が多い点も幅広の部分と違っています。幅広の部分が石垣構築当初からのテラス面と推測されます。庭園部分の背後の石垣にはテラスがあり、湯屋に関連する遺構のある部分の背後にはない、ということになります。テラス面の北端付近には周囲に花弁模様の装飾をもち、一辺約60cmの石塔がのる大きさをもつ礎石がやや傾いた状態で出土しました（78写真）。この礎石の制作時期は江戸時代を遡ると考えられますが、これがテラスの造成された安土桃山時代以降のどの時期に置かれたものか、あるいは置き直されたものか明らかではありません。

曲輪　湯山御殿の庭園・湯屋のある面は標高396.0ｍ、曲輪石垣上面は約402.5ｍ、曲輪面が約401.6ｍと、この石垣上にある曲輪面との比高は約5.6ｍ、石垣上面とは約6.5ｍがあります。

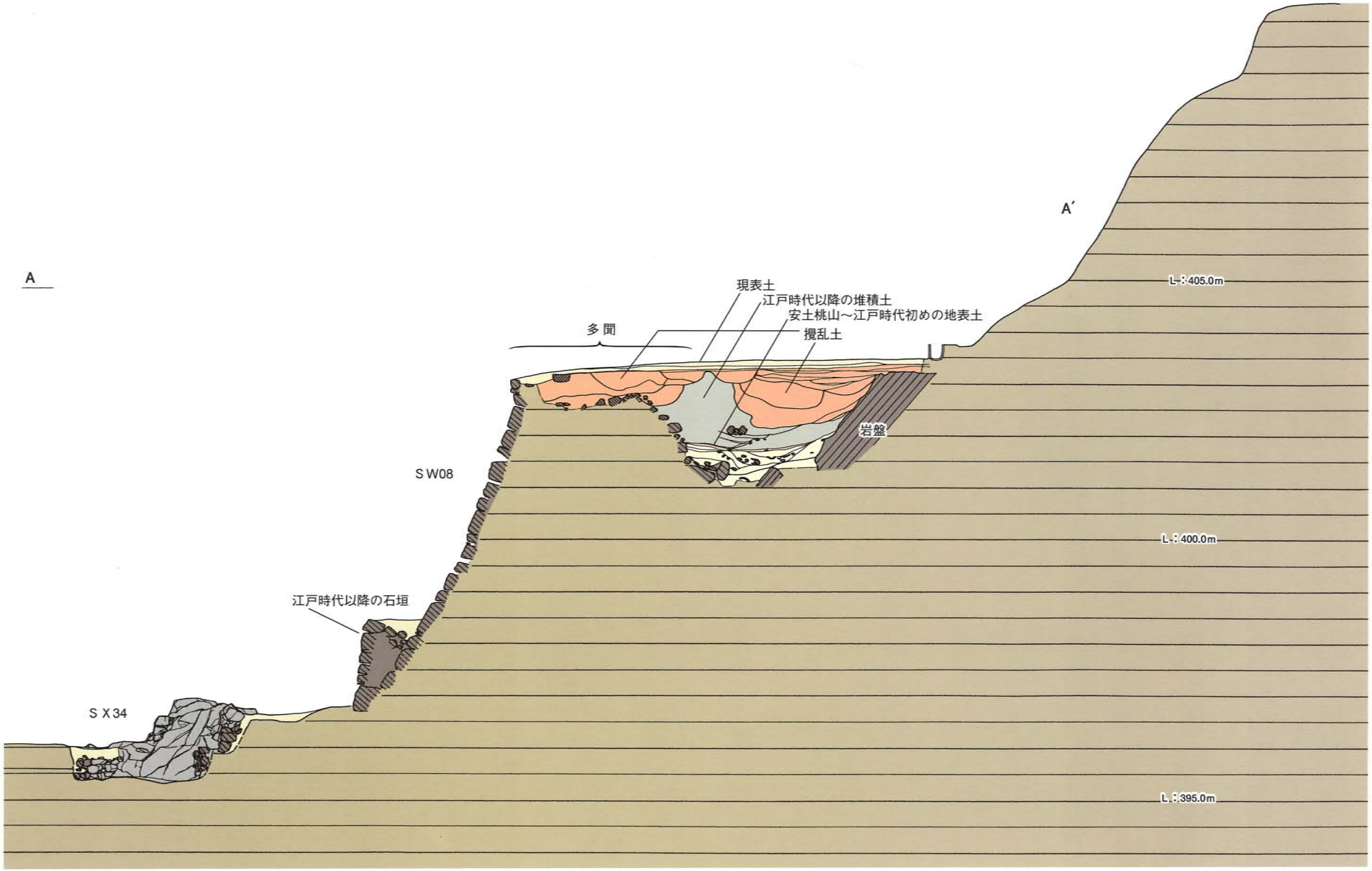
ＳＷ０８は現状で北隅から約65ｍを確認できますが、曲輪の奥行きは最狭部分で約５ｍ、最大幅約15ｍ、平均10ｍ程度であって、曲輪の平坦面はかなり狭長なものとなっています。ここに建物の存在を考えた場合でも、大規模なものは想定しにくいと思われます。

隅櫓　ＳＷ１３はＳＷ０８・ＳＷ０９によって囲われる曲輪の北隅部分で確認された石垣です。ＳＷ０８に並行してのびていますが、石垣面はその反対、すなわち曲輪の内側に向いています（79写真）。したがってこの両石垣間は建物等おそらくは隅櫓の基壇になると考えられます。両石垣の上端間の間隔は4.0ｍをはかります。

多聞　石垣ＳＷ１８は第４トレンチで確認されました。ＳＷ０８と表裏関係になり、曲輪面の周囲を囲う石塁状の遺構の曲輪面側の石垣です。ここで確認された曲輪面の高さは、標高401.8ｍほどで、第３トレンチで確認された曲輪面の高さとほぼ等しく、遺存する石垣の高さは本来の曲輪面上約90cmになります。ＳＷ１３・ＳＷ０８間の上面幅が4.0ｍであるのに対し、ＳＷ１８・ＳＷ０８間の幅は3.0ｍと両者の値が異なっています。第４トレンチで確認された石垣積みの基礎は曲輪の縁辺に巡らされた多聞の基壇と考えられるでしょう。



80.　曲輪面第４トレンチ多聞基壇石垣（南西から）
81.　曲輪面第４トレンチ多聞埋没状況土層断面（西から）
82.　曲輪面第１トレンチＳＷ０８裏込め截ち割り土層断面（西から）　石臼がみえる。
83.　テラス面第２トレンチ土層断面（東から）



84. A～A′ 間 立面・断面

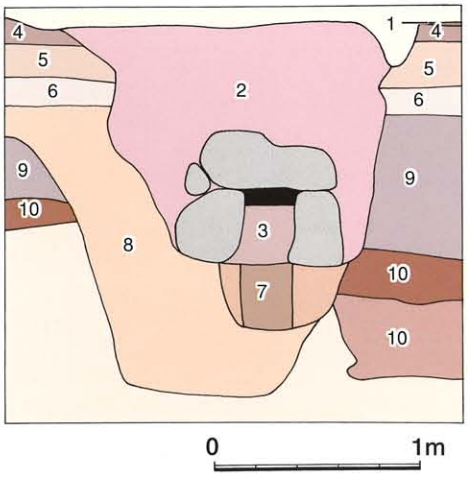
0 10m

―― 御殿敷地の造成 ――

極楽寺本堂の裏手と向かって右付近、また帯曲輪についても截ち割り調査を行い、下層の状況を確認しました。この付近の基盤層は愛宕山山塊が風化して白色になった凝灰岩ですが、これがかなりの傾斜で落ちていることが確認されました。すなわち山腹の斜面地を大がかりに埋め立てて湯山御殿の立地する平坦地を造成していることが判明したのです。埋め立ての土砂の中には、五輪塔なども放り込まれています（87写真）。帯曲輪もほとんど埋め立て造成であることを確認しています（82・83写真）。

第二次調査ではこの平坦面のへり部分を調査しましたが（24・25写真）、ここも直径１ｍをこえる大きな岩を含む土砂で盛り土造成されています（88～90写真）。

造成土から出土する遺物には室町時代の終わりから安土桃山時代のものがほとんどで、それより新しいものは含まれません。遺物の時期からみて、この大規模造成は安土桃山時代に行われたことが明らかです。もとからあった平坦面だけを敷地として湯山御殿が建設されたのではなく、秀吉の命令による湯山御殿の建設のため、温泉寺周辺の斜面地が新たに大規模造成されたものと考えられます。



85. B′～B間土層

1：安永二年(1773)の火災層　火災後整地されほとんど残らない
2：排水溝ＳＤ０２の掘り方・埋め土
3：排水溝ＳＤ０２
4：元禄八年(1695)火災後の整地層
5：元禄八年(1695)の火災層
6：江戸時代初期の盛り土　極楽寺建立の際の整地土
7：泉源ＳＸ２６から湯をひく樋ＳＤ０１
8：蒸し風呂ＳＸ０２を壊す溝ＳＤ０３
9：安土桃山時代、湯山御殿造成の際の盛り土
10：安土桃山時代の溝または流路　慶長の大地震後、温泉がわきだして流れた跡
湯垢の沈殿や流水の状況がよくわかる

86. 湯山御殿の造成土截ち割り状況　B～B′ ライン（北西から）
基盤層の白色土の上の褐色土が造成土。

87. 湯山御殿の造成土截ち割り状況　C～C′ ライン（南東から）
造成土には石塔も放り込まれている。

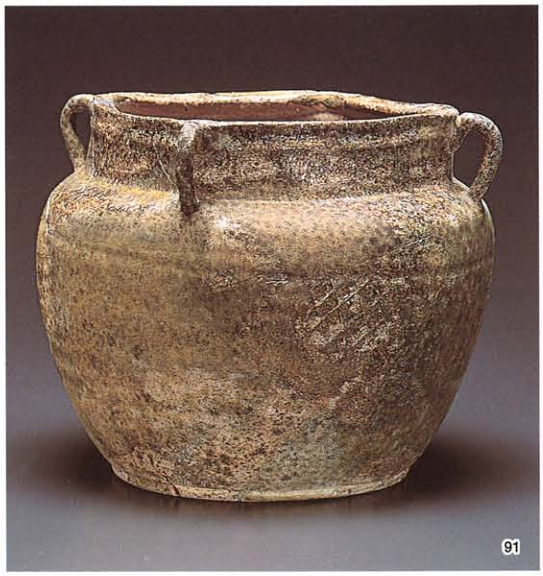
88. 第二次調査地点の造成土（北東から）
石垣裏込めに石塔がみえる。

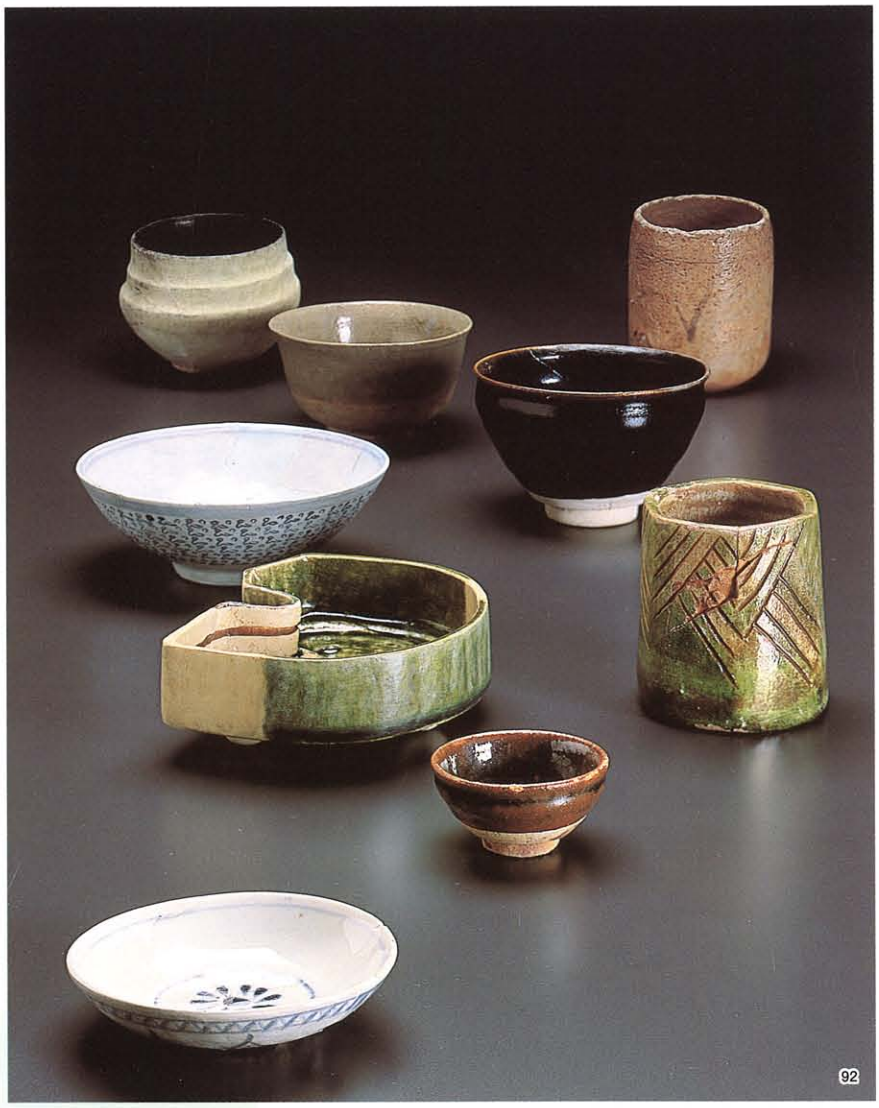
89. 第二次調査地点の造成土断面（北西から）
下位の黒色土が湯山御殿造成以前の地表土。

90. 第二次調査地点の造成土（北東から）
湯山御殿造成土の中に放り込まれる大石。

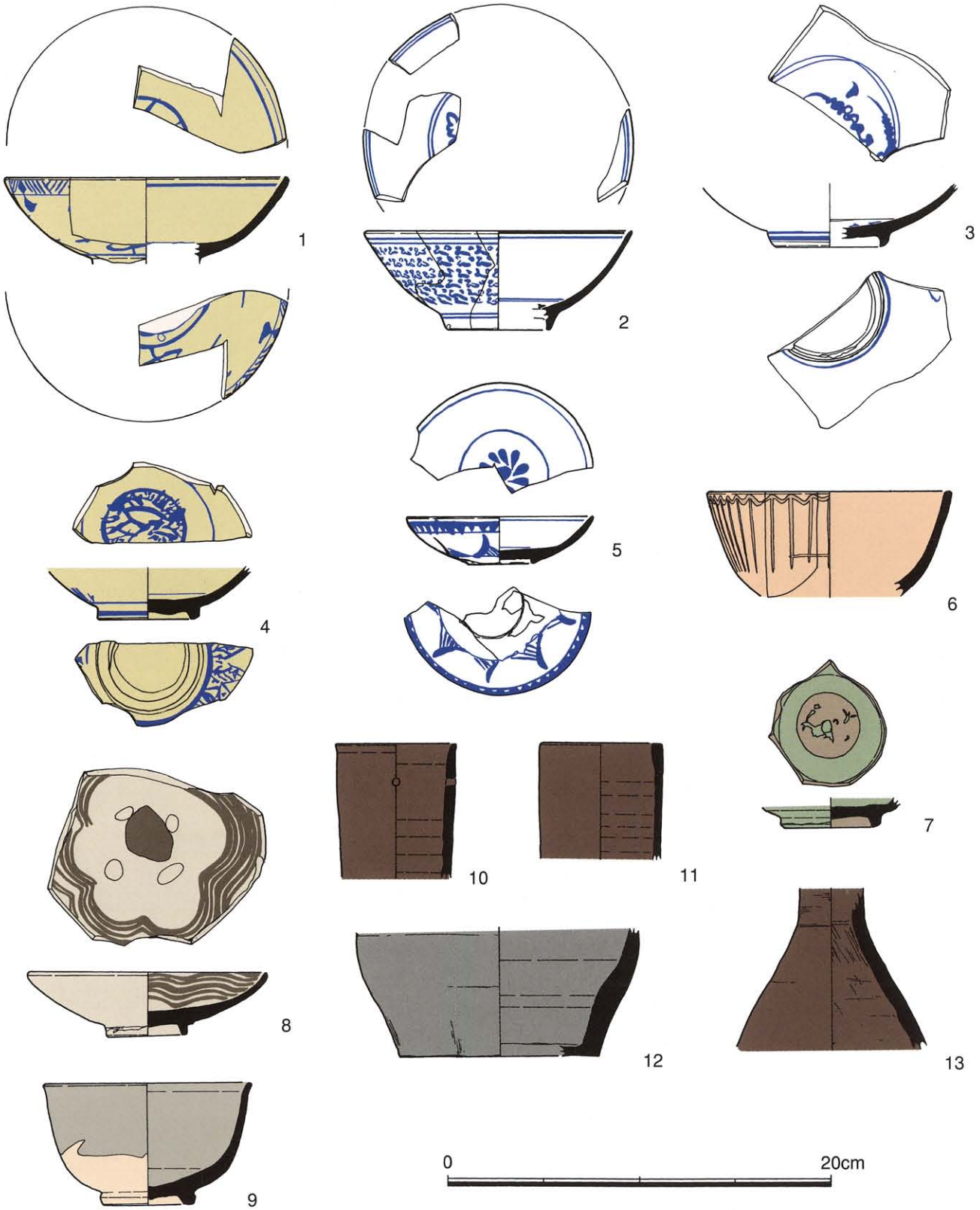
―― 湯山御殿跡から出土した遺物類 ――

湯山御殿跡から出土した遺物には大量の瓦のほか、陶磁器類・碁石などがあります。陶磁器類には花生（はないけ）・壺・天目茶碗（てんもくちゃわん）・向付（むこうづけ）・皿・徳利・杯・すり鉢などがあり、唐津・備前・丹波・志野・織部・瀬戸美濃など各地の製品のほか、中国製品も確認されています。唐津焼・備前焼・丹波焼など旧来からの伝統を引き継ぐ地味なものと、織部の奇抜さに代表されるような瀬戸美濃焼、青磁や白地に呉須（ごす）の絵柄が鮮やかな中国製磁器など派手めなものがあります。花生・徳利・向付・喫茶用の茶碗である天目茶碗などは御殿での生活を具体的に想像させてくれます。なお、織部や背の高い天目茶碗などは秀吉の死後にあらわれるもので、これらが出土することは、徳川氏によって湯山御殿が取り壊され、極楽寺・念仏寺が建てられるのが秀吉の死後すぐではないことの証拠となります。



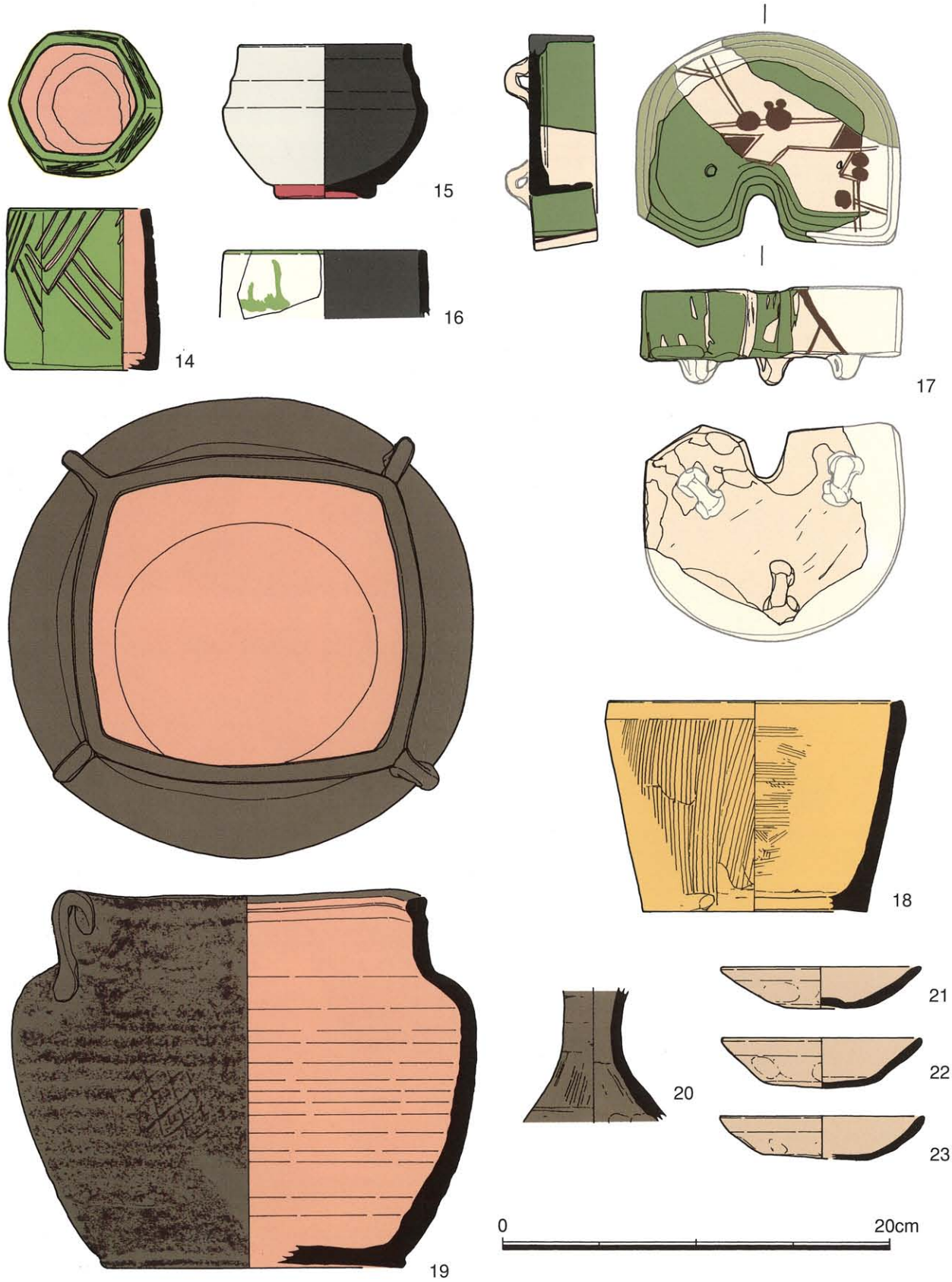


91. 丹波四耳壺（高さ19.5cm）
92. 出土した陶磁器類（左下の白磁皿口径9.6cm）
93. 碁石（実大）　朝鮮蛤でつくる白石は四百年の間に溶けてしまい、那智黒でつくる黒石だけがのこっている。

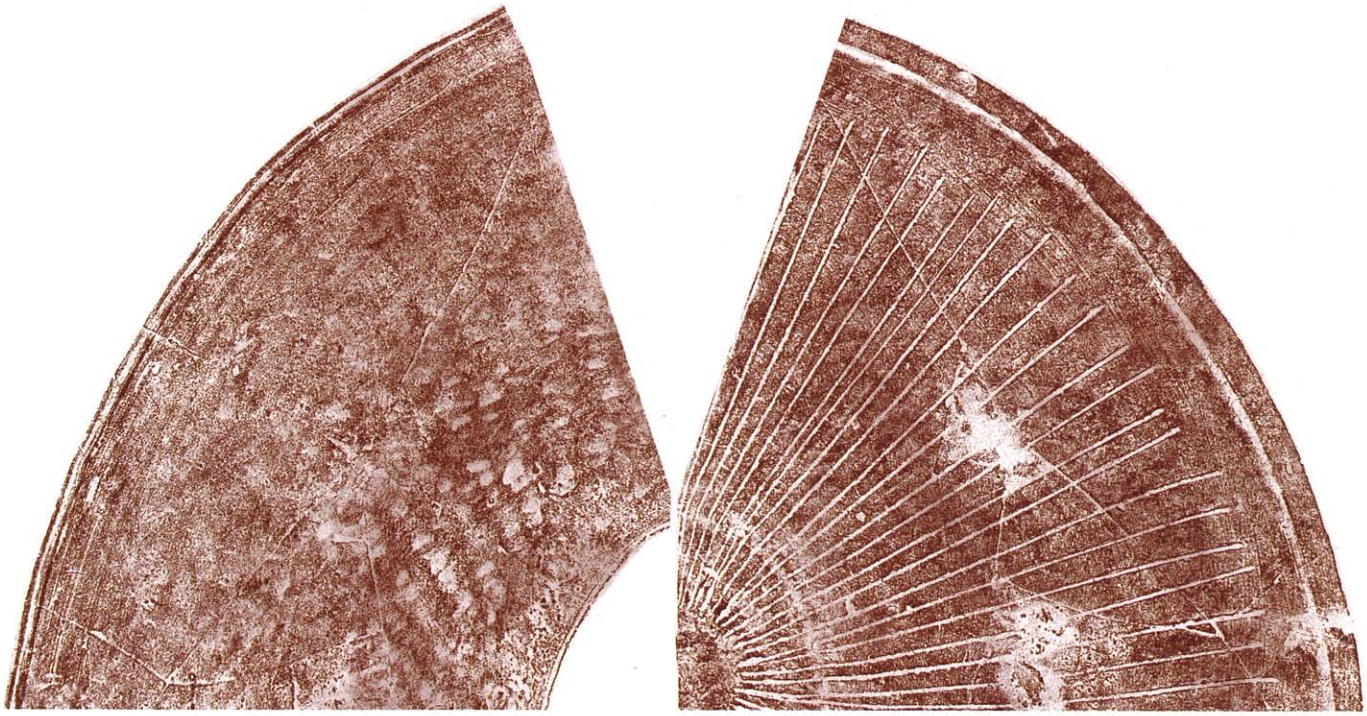


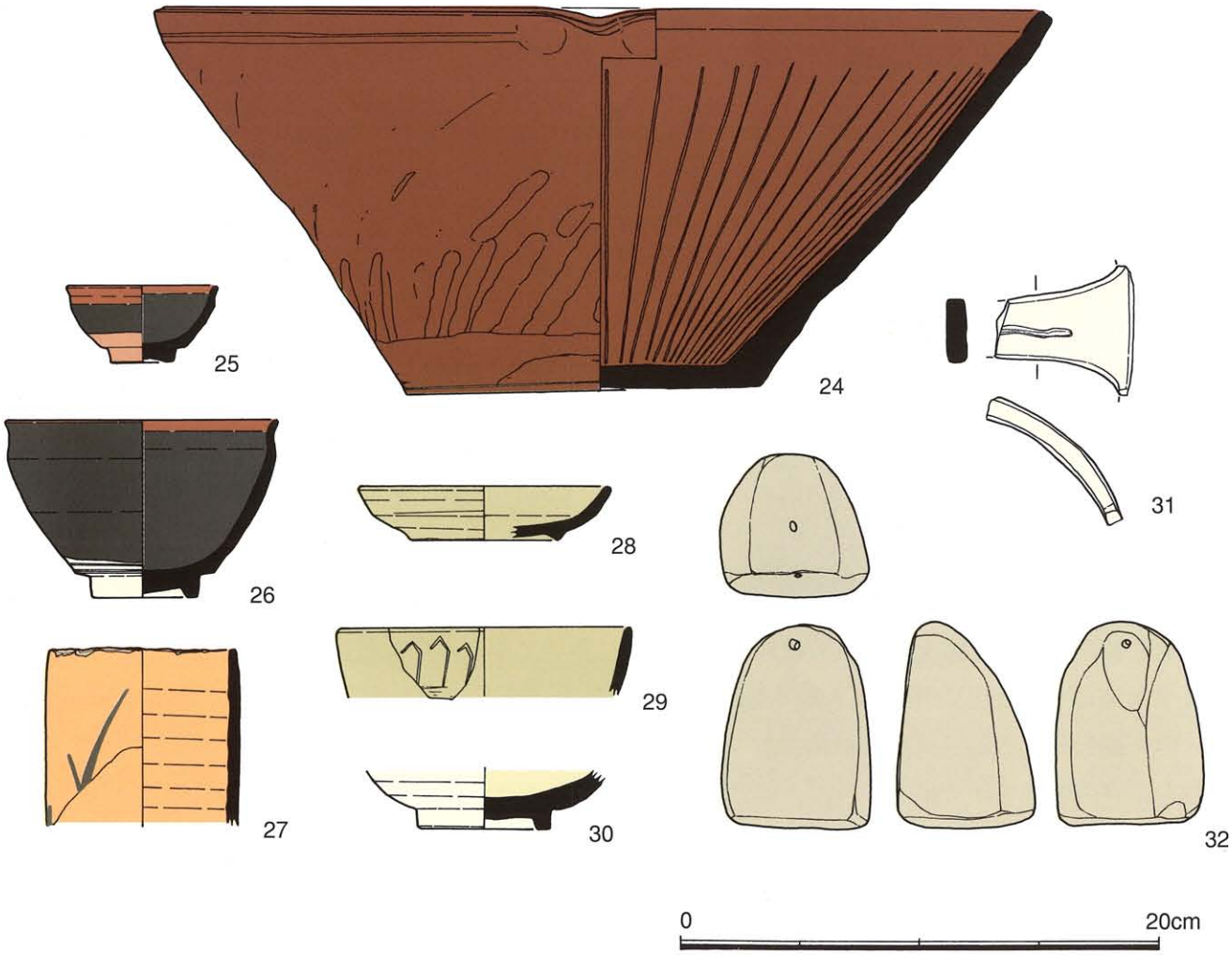
94. 陶磁器類(1)

1・4・5：中国漳州窯系青花、2・3：中国景徳鎮窯系青花、6・7：中国龍泉窯系青磁、8・9：唐津、10～13：備前
1・10：ＳＸ０２、2～6・11～13：４層〔安土桃山時代造成土および湯山御殿期表土〕、7：ＳＸ２３、8：曲輪面、9：３層出土



95. 陶磁器類(2)　14～16：京焼系の軟質施釉陶器、17：織部、18～20：丹波、21～23：土師器
14～16・21：４層、17・22：ＳＸ３１、18：ＳＷ０１、19・20・23：ＳＸ２３出土





96. 陶磁器類(3)・軽石　24：丹波、25～31：瀬戸美濃、32：軽石
24・26・27：ＳＸ２３、25：ＳＤ１０、28～30：曲輪面、31：３層、32：ＳＸ３４出土

97.　龍文棟飾り瓦（左上残存長16.9cm）

98.　桃紋鬼瓦（高さ30.0cm）

『春秋左氏伝』に「桃弧棘矢、以て其の災を除く」とみえ、古くから桃には辟邪すなわち邪気を退散させる力があるとされてきた。この考えは日本にも受け継がれ、イザナギは黄泉の国から逃げ出す時に黄泉平坂で桃三つを投げつけて黄泉軍を撃退している。また強い力を持つその名の故に桃太郎は鬼を退治する英雄となった。桃が造形され、普通の鬼瓦よりも強い辟邪の力を有するこの瓦は鬼門除として屋根の艮（北東）に置かれる。

園池ＳＸ１１が瓦と粘土を使って埋め立てられていることもあって瓦類は1.5ｔ以上と大量に出土しています。完形で出土した平瓦は１枚４kgもありました。平瓦・丸瓦・軒瓦のほか、桃の図柄をもつ鬼瓦・龍を造形した棟飾り瓦などが出土しています。ただし金箔瓦は確認できませんでした。軒瓦には大坂城および四天王寺から出土した瓦と同じ文様の型を使ったものがあります。当時の瓦師は大名に召し抱えられているものであり、豊臣家おかかえの瓦師が関わっていることの明らかな大坂城や四天王寺のものと同じ型をつかった瓦があるということは、ここにあった建物の主が豊臣家であるということで、文献史料とあわせ、この御殿が秀吉の湯山御殿であるということの証拠になるわけです。

また、瓦のなかには湯山御殿が建てられた文禄・慶長年間よりも古い天正年間の瓦があり、その中には胎土の特徴から大坂で作られたと考えられるものもあります。湯山御殿の建物の一部には大坂から移築された建物の存在した可能性も考えられます。

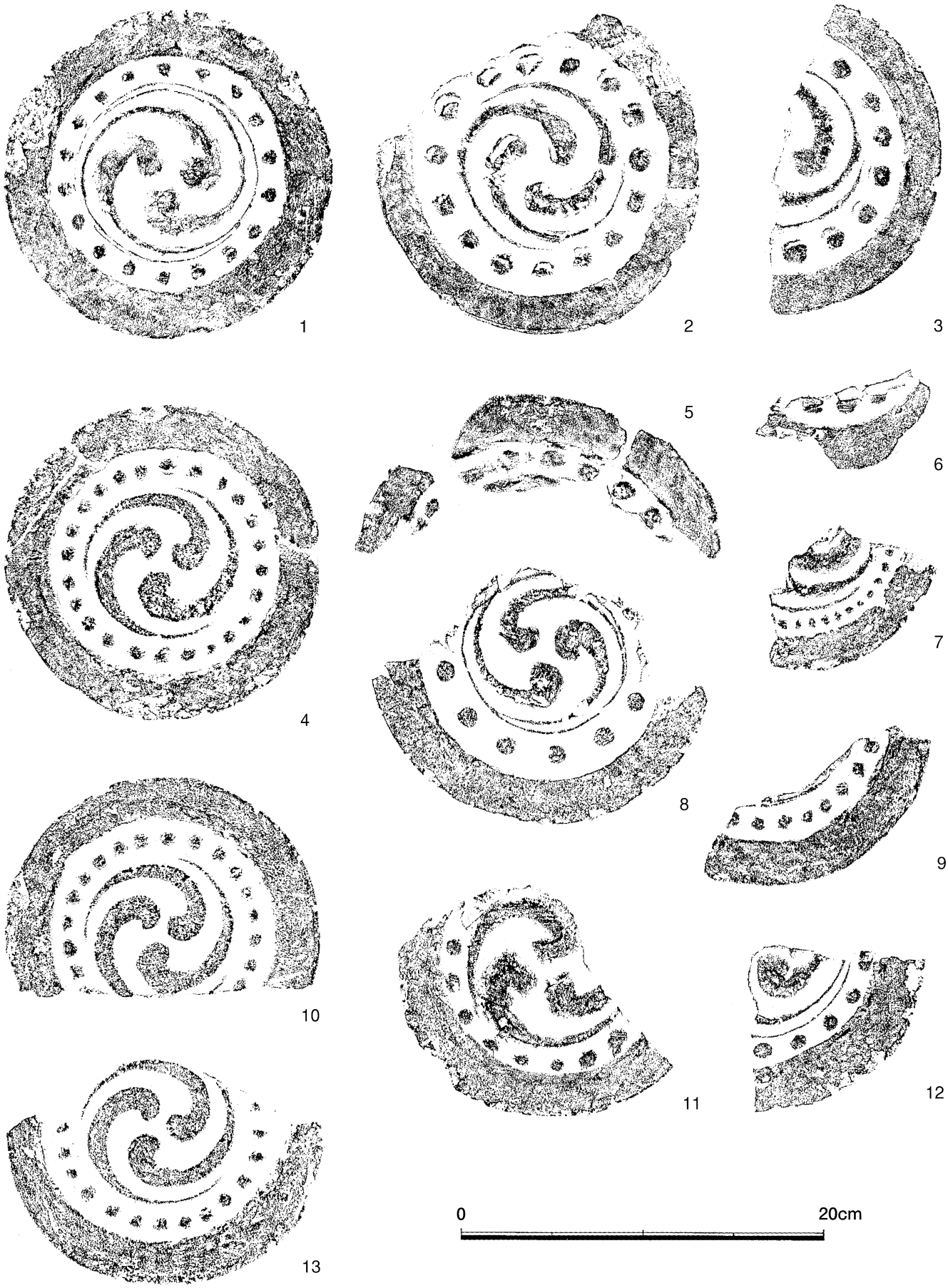
99

100

102

101

99. 軒丸瓦（中央の瓦径19.0cm）
100. 軒丸瓦（瓦当面径17.5cm）
101. 軒平瓦（瓦当面幅30.8cm）
102. 軒平瓦・平瓦



103.瓦当拓影(1)　1：第二次調査地点盛土、2・4～6・8～13：ＳＸ１１、3：３層、7：ＳＤ０４出土

104. 瓦当拓影(2)・龍文棟飾り瓦・桃紋鬼瓦

14・17・19～23・27・28：ＳＸ１１、15：ＳＤ０２、16：３層、18：ＳＫ５１、24：ＳＸ０１、25：ＳＸ１４、26：４層出土

―― まとめと湯山御殿のその後 ――

これまで地元では極楽寺・念仏寺のあたりに秀吉の湯山御殿があったと言い伝えられてきたましたが、正確な地点を伝える文書や絵図などの史料はありませんでした。この伝承の正しかったことを今回確認できたことがこの調査の最大の成果といえます。

今のところ御殿建物の礎石等は検出されていませんが、池の構造、前石と滝の位置関係、また付近の地形から考えると、御殿本体は極楽寺本堂から念仏寺のある地点にあったものと考えてよいでしょう。

確認された遺構・遺物からは、湯山御殿の持つ性格が明瞭に浮かび上がってきます。天下人として多忙をきわめる秀吉が、湯につかり、茶をたて、時に碁を打つ、というやすらぎあるいは癒しの場をもとめて有馬湯山を訪れた姿が目に浮かびます。有馬湯山につくられた湯山御殿のあとが、その主である太閤秀吉の四百回忌の年にふたたび世にあらわれたのも多生の縁と申せましょう。

現在この地に建つ極楽寺・念仏寺はともに徳川氏とかかわりの深い浄土宗で、極楽寺の本堂には徳川綱吉の生母桂昌院の奉納した厨子があり、棟には現在も三つ葉葵の御紋が輝いています。湯屋関連の遺構が埋め立てられたのは出土した茶碗類から江戸時代の初期と考えられますが、湯山御殿がなくなったのには政治的な理由があるようです。

徳川氏が天下をとった後、豊臣氏ゆかりの城などは徹底的に破壊されます。大坂城の現在の石垣等は秀忠の時代に築かれたもので、豊臣期のものは地中に埋められています。伏見城も徹底的に破壊されています。これは豊臣遺臣の拠り所となる憂いを除くための処置といわれています。ここ湯山御殿も同様の運命を辿ったものと考えられるでしょう。湯山御殿の建物が解体され、整地された後に浄土宗の極楽寺・念仏寺などが建てられたものと考えられます。解体された建物はその後三田市にある現在の心月院に移されたと伝えられますが、移された建物も火災に遭い、今は山門だけが残されているにすぎません。

105. 兵庫県三田市心月院山門棟札
湯山御殿の建物がここに移築されたが、延宝六年（一六七八）の火災で山門を除いて他の建物はすべて焼失し、その後宝暦三年（一七五三）の山門修理の際にこの棟札を作ったと記述されている。

106. 兵庫県三田市心月院山門

―― 遺跡の整備 ――

現在、遺跡は『太閤の湯殿館』として整備・公開されています。

湯屋関係の遺構は蒸し風呂一つと岩風呂一つが館内で現地保存、露出展示されています。このうち蒸し風呂は上屋構造を復元した原寸模型を作成しました（46写真）。なお、他の湯屋関連の遺構も埋め戻された上、地下に保存されています。

庭園関連の遺構も土盛りを行い、埋め戻していますが、調査の成果に従って遺構の真上ちょうど１ｍのところに同様の園池・石組み溝・石垣などを築き、庭園を復元しています。庭木として植えられている黒松・つつじなどは花粉分析の成果によって湯山御殿の当時この庭園に植えられていた可能性が高いものです。

帯曲輪についても、石垣が安土桃山時代の特徴を良く示すものであり、崩壊部分を積み直すなどこれを整備し、『太閤の湯殿館』庭園の背景として生かしています。

『太閤の湯殿館』には遺構のほか、陶磁器・瓦・石塔などの出土遺物や有馬と秀吉にかかわる古文書類も展示しています。また、湯山御殿だけではなく、有馬の歴史・観光等についても紹介し、有馬について総合的に理解していただける展示施設を目指しています。

107.　太閤の湯殿館　外観
108.　太閤の湯殿館　内部
109.　太閤の湯殿館　内部
110.　太閤の湯殿館　内部

――『太閤湯殿館』案内――

所 在 地：〒651-1401 神戸市北区有馬町1642　TEL078 (904) 4304
開 館 日：1月6日～10日を除く毎日　※臨時休館することがあります
開館時間：午前9時から午後5時まで（入館は午後4時30分まで）
入 館 料：一般200円、児童・生徒100円
　団体割引　30～49人：1割引、50人～99人：2割引、100人以上：3割引
　身体障害者手帳・療育手帳・神戸市老人福祉手帳・のびのびパスポートなどをご持参の方は無料
交　　通：神戸電鉄「有馬温泉駅」下車南へ徒歩8分
　六甲有馬ロープウェー「ロープウェー有馬駅」下車徒歩北東へ徒歩10分
　※駐車場はありません

調査ならびに本書刊行にあたりご教示・ご協力いただいた皆様
赤沼多佳・茨木一成・小野健吉・兼康保明・北垣聰一郎・久保智康・黒田慶一・黒田龍二・小林謙一・
小林平一・沢田正昭・十河良和・鷹取嘉久・多田暢久・多淵敏樹・西桂・平澤毅・藤井英三郎・
古谷毅・宮本佐知子・森村健一・山岸常人・吉田一夫・余田修進・渡辺武
有馬温泉観光協会・有馬町活性化委員会・温泉寺・神戸市立中央図書館・神戸市立博物館・極楽寺・
心月院・善福寺・湯泉神社・奈良国立文化財研究所・念仏寺・平凡社・別府市役所温泉課

遺物撮影は奈良国立文化財研究所牛島茂氏・杉本和樹氏・丸山潔による

111. 石垣SW08（北東から）

報告書抄録

書　　名	ゆの山御てん ――有馬温泉・湯山遺跡発掘調査の調査――
副 書 名	
巻　　次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	須藤 宏
編 集 機 関	神戸市教育委員会
所 在 地	〒650―8570 兵庫県神戸市中央区加納町6―5―1　TEL078-322-5798
発行年月日	西暦2000年3月31日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
湯山遺跡	兵庫県神戸市北区有馬町	市町村 2819	遺跡	34°46′20″	135°15′05″	1次 19961220～19971003 2次 19971203～19980109 3次 19980408～19980831 4次 19981216～19981224	1次 約450㎡ 2次 約90㎡ 3次 約100㎡ 4次 約30㎡	1次 庫裏建て替え 2次 個人住宅建設 3次 庫裏建設 遺跡範囲確認 4次 泉源改修・遺跡範囲確認

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
湯山遺跡	寺院・館	江戸時代 安土桃山時代	寺院建物 御殿	陶磁器 瓦	1596年・1598年に建設された豊臣秀吉の湯山御殿の一部、湯屋・庭園・帯曲輪が確認された。他に江戸時代の火災面2枚。

ゆの山御てん――有馬温泉・湯山遺跡
発掘調査の記録――
2000年3月31日発行
発行者　神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区加納町6―5―1
TEL078(322)5798
印刷者　共栄印刷
神戸市中央区花隈町22―6
広報印刷物登録：平成11年度第396号　A―6類